

一般社団法人

地域国土強靱化研究所

令和 4 年度年報

一般社団法人 地域国土強靱化研究所 令和4年度年報

【代表理事ご挨拶】 本法人は、令和5年7月1日をもって設立から4年目に入ります。会員の皆様、役員
の皆様、そして事務局スタッフの皆様のご協力で、少しずつ認知が広がってまいりました。地域の皆様の技術力高揚のご支援の一層の拡大と併せまして、本年度は、業務として、「災害低減」と「気候変動対応」に関する種々のご要請に応えるべく、LRR I 独自の技術の集約とともに技術の融合を進めて新たな技術（ICRT & DX 技術など）の提案を目指していく所存です。そのために、現在進めています「気候変動対応技術&ビジネス研究会」と併せて、“低炭素社会の推進”のために建設関連分野のできることに研さんの機会を組織的に進めてまいります。そしてその成果を書籍として出版することを目指したいと考えております。皆様の一層のご協力をお願いする次第です。



安原一哉 代表理事

【部門活動報告】

《事業部》

① 第2回会員報告会の開催

令和4年8月24日（水）の年次総会後に、3名の新入会員のご紹介と、賛助会員・個人会員から5編の報告をフリーテーマで実施しました。3編は国土強靱化に供する防災・減災技術等に関わる取組み・事例紹介でした。また岸田副代表からは、LRR I が実施しておりました「グランパ・カズ塾」の状況報告をいたしました。最後に安原代表より、LRR I が取り組んでおります「気候変動対応戦略」についてこれまでのご報告をさせていただきました。限られた時間の中でしたので十分な意見交流とまでは参りませんでしたが、今後はテーマを絞ることも考慮し、このようなイベントを通じて会員の皆様と更に親交を深めていく所存です。

② 茨城大学委託業務の遂行

令和3年度に引き続いて、茨城大学より、「気候変動影響予測・適応評価の総合的研究（S-18）」（環境省環境研究総合推進費）のサポート業務の一環として、「気候変動適応策オプションの分類に関する調査委託業務」の委託を受けました。国、自治体、事業者（企業など）から公表されている国内の事例を中心として442件（一部、IPCCにおける事例も含まれている）の適応策を整理し、① 調査報告書、② 個票、③ 分類一覧表（一式）、④ 追記集としてまとめました。この成果は、大学のホームページにアップされたのちに、会員の皆様にも公表させていただきます。

③ 会員開発技術の推進支援

賛助会員である（株）水戸グリーンサービスが開発中の「レックスウォール工法」の試験施工に際して、LRR I として技術支援を行いました。

茨城県城里町の試験ヤードにおいて、補強土背後地盤で「スクリーウエイト貫入試験」を実施するとともに、盛土試料の物理・突固め・三軸圧縮試験を実施し、アンカー緊張効果による地盤強度等の関連を確認しました。今後はアンカー・抵抗プレートの配置、及び時間効果も加味して、引続き本工法の有効性を検証する所存です。

④ 書籍出版

LRR I としては初めての試みですが、LRR I の編集・発行により、常田賢一顧問著：「防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務－個別最適から全体最適への展開－」の書籍を、令和 5 年 3 月に出版しました。販売は外部委託し、事務の円滑化を図りました。今回の出版活動に基づいて、LRR I における「刊行物出版規定」が第 8 回理事会で承認されて、7 月 1 日から施行しました。今後、出版によって、LRR I の活動成果の見える化をより一層図っていく予定です。なお、本書のご注文は、下記にお願い致します。

東京官書普及（株） 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-2 TEL：03-3292-3701

URL：http://www.tokyo-kansho.co.jp 土木関係専門書籍販売サイト シビル Books

地域国土強靱化研究所書籍販売サイト[東京官書普及（株）](tokyo-kansho.co.jp)

《技術開発・展開部》

①「気候変動対応技術&ビジネス研究会」

事業部と連携して茨城大学から委託を受けた“気候変動適応策に関するアンケート調査”と、それに続いて現在委託を受けています“日本における適応策の集約&分析業務“(事業部②参照)を中心にした活動を行っています。その成果を会員の皆様に還元し、成果を共有する努力を続けていく所存です。

②「インフラリハビリ研究会（IRT 研究会）・FS 工法分科会」

茨城大学と産学連携した『フォームサポート工法により補強された橋梁の 1G 場振動台実験による耐震性評価』を令和 4 年度は LRR I も加わり、茨城大学・東亜建設工業・JSP・LRR I の 4 組織で共同研究を行いました。内容は、東亜建設工業保有・一次元振動台を用いて橋台模型の背後地盤沈下量、水平変位量の計測を L2 地震動までを想定して行い、L2 地震においても、耐震性能があるという結果を得ました。引き続き老朽化橋梁にフォームサポート工法を使用した際の安全性、効果について検証を行い安心や信頼を持って採用していただけるように働きかけると共に FS 工法分科会としての社会貢献、国土強靱化の一助となるような活動を目指して参ります。

《教育支援部》

①（一財）土木研究センターと連携した第 3 回技術者講座「最近の国土強靱化技術」

一昨年・昨年に引き続き、令和 5 年 5 月 17 日と 24 日の 2 日間、土木研究センターと LRR I が共同主催で「第 3 回技術者講座『インフラ強靱化に関する最近のトピックス』」が実施されました。講師は、土木研究センターから落合盛人 材料・構造研究部長、井手統一 土工データベース情報管理室長のお二人と、LRR I から常田賢一 顧問（土木研究センター顧問 兼務）、地盤品質判定士会神奈川支部 立花秀夫 支部長のお二人が担当しました。

この内、常田顧問から「防災・減災、国土強靱化のための性能評価の姿勢&視点」の演題で、LRR I 発行第 1 号となる「防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務－個別最適から全体最適に展開－」（330p., 2023.3.1）をテキストに用いて熱い思いの籠もった講演が行われました。また、立花支部長から「インフラメンテナンスに貢献する宅地地盤相談－神奈川の活動事例－」の演題で、「土木学会 令和 4 年度インフラメンテナンスチャレンジ賞」の対象となった活動を中心に講演されました。加えて、落合部長から「橋梁定期点検を支援する事例解説集」、井手室長から「土工構造物データベース」と、最新の情報が講演・解説されました。

いずれも、時宜を得た特に新しいテーマに関する講演で、会場・オンラインで参加された方々は大きな感銘を受けました。地盤工学会関東支部の共催を得て、2 日間の講座に延べ 132 名の方が参加されました。

② 創設2周年記念フォーラム

令和4年7月2日(土)の午後、「放射性物質含有土と向き合う」をテーマに掲げて、「創設2周年記念フォーラム」が、茨城県産業会館の会場とオンラインの“ハイブリッド形式”で、会場に11名、オンラインで24名、計35名のご参加を得て開催されました。

講演には、「放射性物質」に関する権威と、最前線で取組まれた技術者をお招きしました。「廃炉地盤工学」の提唱者で、地球温暖化や脱炭素社会を実現するための新技術開発に積極的に取組まれる早稲田大学 小峯秀雄教授による「土と放射性物質との経験から考える『原子力と土木の協業』」と題する記念講演が行われました。更に、茨城大学で安原教授と小峯准教授(いずれも当時の肩書き)に地盤工学を学び、福島県庁に入られて、放射性物質含有土を扱う実務で中心的役割を果たされた高畑 修氏が講演されました。高畑氏は令和4年2月には、小峯教授を指導教官として、早稲田大学から博士(工学)の学位を授与されています。

2題の講演後には、講演者に茨城大学でも教鞭を執られた村上 哲 福岡大学教授、安原 LRR I 代表理事も加わって、「放射性物質含有土と向き合う」について、活発なパネルディスカッションが展開されました。

③ E&E・防災セミナーをNPOブルーアース・地盤品質判定士会神奈川支部と共同主催

一昨年度・昨年度に続いて、防災に関する「エネルギー&エコロジー(E&E)セミナー」が、「防災の視点から環境問題を考える」をテーマに3団体共同主催で、令和4年①11月24日・②12月8日・③12月15日の木曜日3日間、オンラインで開催され、延べ141名の参加を得ました。昨年度からは、NPOブルーアース・地盤品質判定士会神奈川支部に加えて、LRR I も共同主催者に加わり、所属する6名が講義・話題提供・司会を担当しました。

中でも、丸山 泉 監事の「防災の視点から環境問題を省みる」は、建設事業と環境問題の歴史的変遷、土砂災害事例、自然生態系を活用した防災・減災対策と展開され、アンケートでも高い評価を受けた大変有意義な講義でした。LRR I のメンバーが優れた知見を有することを、組織の外部の方々にアピールできました。なお、現役の行政職、防災ビジネスパーソン、防災の専門家など幅広い方々が講義を担当されました。さらに、熱海伊豆山土石流災害の被災者に寄り添ったインタビュー報告や、数多くの市民相談事例が紹介され、市民との連携を実感することができました。

3日間のセミナーの最後に安原代表理事が総括を担当しました。ここでは、「災害と環境」相互関係での『強靱化』の意義、防災・環境における『ワガ(ワレワレ)コト化』の重要性、LRR I など「非営利団体」の果たすべき役割などが述べられ、本年度のセミナーも得るものが大きかったことを実感できました。

④ 企業研修講座の実施・資格取得支援講座の準備

昨年度に引き続き、技術者支援講座「エルリ塾」として、「土構造物・基礎地盤コース」(グランパカズ塾 Part 2)と「ICRT & DX 講座コース」を実施しました。2つのコースのプログラムは、表-1のとおりです。

1) 令和4年度企業研修講座の実施

(a) 「土構造物・基礎地盤コース」(グランパカズ塾 Part 2)

LRR I 役員に加えて、経験豊かで高い見識を有する実務家と大学教授を迎えて7名の講師陣により、15名の参加者に対して10回に亘る講座を充実した内容で実施できました。新しい講師には、実務で遭遇することが多い「斜面防災」、「擁壁安定問題」、「地盤環境対策(土壌汚染と廃棄物)」を担当いただき、講座参加の方々に好評でした。

講座では、毎回、事前資料の配付と併せて、事前の問題が課せられ、更に、毎回の後半には当日問題が出され、講義内容の理解の向上が図られました。質疑応答に加えて、講師による事例紹介や参加者との意見交換が活発に行われました。

(b) 「ICRT & DX 講座コース」

LRRRI 会員を主体として、本テーマに関する経験豊かで高い見識を有する実務家を迎えるとともに、弊法人における ICRT 関連分野のとりまとめ担当がコーディネーター役として、カリキュラムを構成し、6名の参加者を得て、9回に亘る講座を開設、実施できました。特に本講座は近年のデジタル化社会における情報取得、活用の考え方とその要素技術について基本的な検討、修得することを目的とし、これからの未来社会を描くことができる企業人としての素養を講師と共に学ぶことができました。特にインフラ分野における DX の適用方法および取り組み例についても学び、LRRRI 会員様の業態に合せた業務改革および新しいビジネスを発想できる基礎力を体得されたものと考えております。特に、本テーマに初めて取り組まれる参加者もあり、様々な立場からの質疑応答、議論は参加者のみならず講師の方々からも好評を得ました。

表-1 エルリ塾 令和4年度実施プログラム

(a) 「基礎地盤・土構造物講座」(グランパカズ塾 Part 2) 担当責任者：安原一哉 代表理事

| 回数 | 月日 | 課題 | 担当講師 |
|----|-------------|--|--------------------|
| 1 | 令和4年 10月12日 | 土と構造物と地盤： 何を習得するのか？ | 安原一哉 |
| 2 | 令和4年 11月 9日 | 設計と施工に必要な地形と地質の 知識<その1> 地形・地質と斜面防災 | 助田勅史 |
| 3 | 令和4年 12月14日 | 設計と施工に必要な地形と地質の 知識<その2> | 伴 夏男 |
| 4 | 令和5年 1月11日 | 地盤調査と土質試験： 土のプロフィルとモニターユ | 伴 夏男 |
| 5 | 令和5年 2月 8日 | インフラストラクチャのモニタリング | 丸山 泉 |
| 6 | 令和5年 3月 8日 | 地盤と構造物の支持力と沈下 | 安原一哉 |
| 7 | 令和5年 4月12日 | 擁壁の安定 | 西村真二 (地盤品質判定士会) |
| 8 | 令和5年 5月10日 | 豪雨と液状化対策： 地盤改良と地盤補強 | 岸田隆夫 |
| 9 | 令和5年 6月14日 | 地盤環境対策： 土壌汚染と廃棄物 | 小林 薫 (茨城大学) |
| 10 | 令和5年 6月28日 | 技術者の倫理 | 岸田隆夫 |

(b) 「ICRT & DX 講座」 担当責任者：須田裕之 副代表理事

| 回数 | 月日 | 課題 | 担当講師 |
|----|-------------|--------------------------------------|-------|
| 1 | 令和4年 11月29日 | 「ICRTおよびDXとは？」 (デジタル化からDXとしての展開へ) | 須田裕之 |
| 2 | 令和4年 12月20日 | インフラ分野におけるICRTおよびDX概要 (政策および技術動向) | 須田裕之 |
| 3 | 令和5年 1月31日 | 要素技術各論(1) データベース技術と空間情報 | 中村健太郎 |
| 4 | 令和5年 2月28日 | 要素技術各論(2) ネットワーク技術と情報プラットフォーム | 須田裕之 |
| 5 | 令和5年 3月28日 | 要素技術各論(3) センサ・制御技術と表現および人間拡張 | 須田裕之 |
| 6 | 令和5年 4月25日 | インフラ分野におけるDXシステムの考え方 | 玉井久嗣 |
| 7 | 令和5年 5月30日 | インフラ分野におけるDXの取り組み(1) | 山田岳峰 |
| 8 | 令和5年 6月27日 | インフラ分野におけるDXの取り組み(2) | 黒木幹 |
| 9 | 令和5年 6月27日 | インフラ分野におけるICRTおよびDXのま とめと今後の課題 | 須田裕之 |

2) 資格取得支援講座の準備

また、今年度は、激変する資格試験環境の中、LRRRI 会員の資格取得支援を効果的に実施できるように、講師予定者による数次の「準備会」で、情報共有と議論を重ねました。その結果、資格試験を技術者が資質向上を図る強力な「道案内」と位置づけて、来年度には「(仮題) 旬な用語講座」として、資格取得を支援する予定です。上記「グランパ・カズ塾 Part 2」の参加者アンケート結果も活かし、更に改善を図る計画です。

⑤ エルリの活動を通じての継続教育の促進 (CPD ポイントの付与)

上記①～④を始め LRRRI が実施する講座や講演会に参加された方 (聴講者・講演者共) には、継続教育ポイント (CPD ポイント) が付与されます。建設系 CPD 協議会に参加する地盤工学会、土木学会、建設コンサルタンツ協会、全国地質調査業協会連合会、日本技術士会などに登録できますので、技術者として極めて重要な「継続的な自己研鑽」の指標としてご利用ください。さらに、既に取得された地盤品質判定士などの資格更新や、今後展開が予想されます「技術士 (CPD 認定)」の登録・更新などに活用が期待されます。

⑥ LRRRI 技術情報：特別寄稿

2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震から 12 年が経過した、2023 年 3 月 11 日に合わせて、技術情報の特別寄稿として、「常田賢一：東日本大震災の復興により津波に備える沿岸陸域の姿から学ぶ—津波災害から 12 年を経て—、LRRRI 技術情報 20230311、pp.1-88、2023.3」をホームページに掲載しました。

【事務局便り】

《本法人ホームページの更新管理》

本法人のホームページ (URL : <https://lrrri.or.jp/>) を引き続き管理運営いたしました。従来の構成を引継ぎ ① LRRRI とは ②業務内容 ③会員専用 ④入会案内 ⑤会員関連技術 ⑥役員だより ⑦お問合せ (住宅相談) としています。対応の不備もあり、新着情報 (ニュース・イベント) の更新タイミング等の遅れや lrrri ドメインのメール逸失等を生じたこと、改めてお詫びいたします。今後は管理運営体制を見直すと共に、プライバシー保護、セキュリティ管理を進めてまいります。また、組織内 DX の考え方を取り入れ、ホームページを活用した、LRRRI 技術情報の蓄積や会員相互の情報共有に取り組みたいと考えております。今後も引き続き、皆様に親しまれるホームページの作成に取り組んでまいりますので、ご理解、ご支援と共に忌憚のないご意見をお願いいたします。

《理事会 (役員会) 報告》

令和 4 年度は 8 回の理事会 (役員会) を開催しました。議事録を「会員専用ページ」に掲載しています。本法人の運営、活動について議論が、整理されています。

【情報活動】

《内閣府からのヒアリング対応》

令和 5 年 3 月 22 日に内閣府から、「社会資本整備」に関する LRRRI の考え方のヒアリングをオンラインで受けました。茨城大学とも相談のうえ、LRRRI の過去の業務事例を踏まえた“地域における国土強靱化のあり方”に関する防災・減災と気候変動への対応に関する意見を述べる機会となりました。

《メルマガによる情報発信》

プルダウン型の HP による情報発信に加えて、メルマガとニュースをプッシュ型で配信しています。メルマガは、会員全員に毎月配信しておりますが、配信後は、会員専用ページにアップしています。また、「LRRRI ニュース」はプッシュ型情報発信としてホームページの表紙部分に掲載されています。

《役員便り》

月に一度の「会員&役員だより」を掲載していますので、お目通しください。なお、令和5年度は法人会員（特別賛助会員、賛助会員）の皆様にも投稿をお願いしますのでご協力ください。

【今後の展望】

《安原代表理事》

会員の皆様とご関係の皆様のご協力を得て、気候変動対応などの困難な課題に挑戦することによって、地域貢献とともに国際貢献も含めて、他に類を見ない“地域社会貢献型一般社団法人”を目指して参りたいと存じます。また、会員の皆様のご所有の技術の新たな展開や双方向型継続教育支援など、会員サービスを一層充実させてまいります。

《岸田副代表理事》

会員と関係者の皆様のご理解とご支援をいただき、第3年目の1年間、LRRIの教育支援部の活動を進めることができました。外部講師を迎えて、昨年7月の創設2周年記念フォーラムに始まり、本年5月の第3回技術者講座まで、最新・最先端の知見をLRRIの皆様と共有することができました。また、第2年目にグランパ・カズ塾として開催された企業研修サポートは、グランパ・カズ塾Part2として、10回に亘る講座を充実した内容で実施できました。また、激変する資格試験環境の中、LRRI会員の資格取得支援を効果的に実施できるように、講師予定者による数次の「準備会」で、情報共有と議論を重ねました。その結果、資格試験を技術者が資質向上を図る強力な「道案内」と位置づけて、第4年目に「(仮題)旬な用語講座」として、資格取得を支援する計画ができました。

また、昨年11月・12月には、NPOブルーアースと地盤品質判定士会神奈川支部の2つの外部組織と共同主催して、E&EセミナーNo.21(防災・2022)を行い、広く市民・行政職・専門家に加えて、LRRIのメンバーが講師・パネラーとして活動することができました。今後も、市民の自助、技術者の共助、自治体の公助を念頭に、LRRI内外との相互理解と協働を通じて、「環境問題の下で地域の防災力向上(強靱化)に役立つ活動」をLRRIとして進めて行きたいと思えます。皆様には、よろしく願いいたします。

《須田副代表理事》

会員と関係者の皆さまのご理解とご支援をいただき、この1年間、LRRIの事務局活動を進めることができました。ICRT技術が進む中、コロナ禍においてセミナー等のオンライン併用のハイブリッド実施を検討させていただきました。様々な社会情勢の変化になかなか追い付けず、会員およびご支援頂いている方々にご満足頂けたか、反省すると共に、今後も引き続き改善に取り組ませて頂く所存です。特にセミナー等実施に際して、参加申込やアンケートについてフォーム入力形式を採用し、データ入力の効率化を行わせていただきました。また、「ICRT & DX講座コース」を開催させて頂き、今後のICRTおよびDX研究会の取り組みの端緒とさせていただきます。取り組む課題は多く、引き続き皆様方のご支援、ご協力を頂きたく、何卒よろしく願いいたします。

《常田顧問》

令和4年度にLRRIの顧問にして頂きましたが、「防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務一個別最適から全体最適への展開」の書籍について、LRRIの編集・発行により、令和5年3月に無事、刊行することができました。この書籍の編集・発行に際しては、会員の皆様による技術資料掲載および販売・広報などの御協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。引き続き、同書の拡販に努めますとともに、LRRIの活動に資するように努めますので、御理解、御協力を宜しく願いいたします。

《末次顧問》

令和 5 年度より顧問となり、フォーラム等で活動させて頂いています。まだよく分からない所もありますが、専門の河川防災・減災などを多くの方々にお伝えしていきたいと思ひます。今後、地域国土強靱化研究所の活動の一助になればと思ひますので、皆様のご支援をお願いいたします。

【役員顔ぶれ】(令和 5 年 7 月 1 日現在)



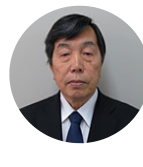
安原代表理事



岸田副代表理事



須田副代表理事



常田顧問



末次顧問



岡本理事



小浪理事



田中理事



伴理事



丸山監事



霜越監事

【特別賛助会員紹介】

(株)JSP 〒100-0005 東京都千代田区丸の内 3-4-2 (新日石ビル) 03-6212-6362
<https://www.co-jsp.co.jp/>

【賛助会員紹介】

アキレス(株) <https://www.achilles.jp/>

イーテック(株) <http://www.earth-techno.co.jp/>

エターナルプレザーブ(株) <http://www.etp21.co.jp/>

岡三リビング(株) <https://www.okasanlivic.co.jp/>

昭和コンクリート工業(株) <https://www.showa-con.co.jp/>

(株)高萩エンジニアリング <http://www.t-hagi.co.jp/>

地水開発(株) <https://chisui-kaihatsu.co.jp/>

(株)T&S 開発設計事務所

東京インキ(株) <https://www.tokyoink.co.jp/>

(株)福山コンサルタント <https://www.fukuyamaconsul.co.jp/>

(株)水戸グリーンサービス <http://www.greenservice.jp/>

みらい建設工業(株) <https://www.mirai-const.co.jp/>

メトリー技術研究所(株) <http://www.metry.jp/>

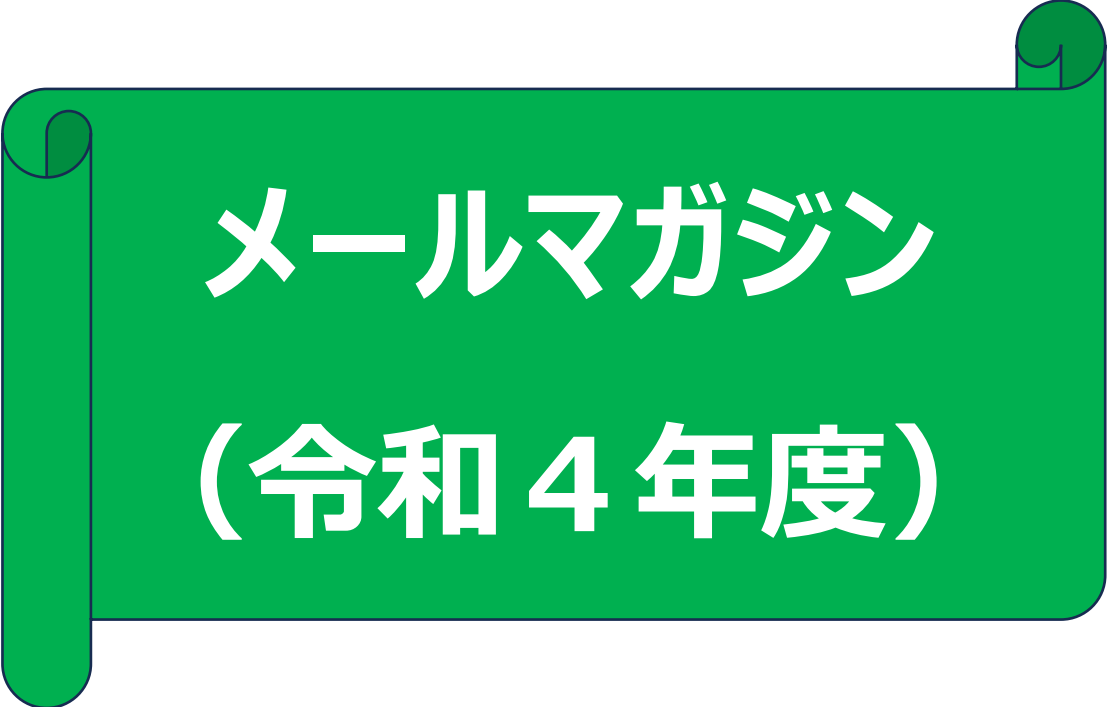
木材活用地盤対策研究会 <https://mokuchiken.com/>



一般社団法人 地域国土強靱化研究所

ホームページ <https://lrri.or.jp>
〒311-0105 茨城県那珂市菅谷 4527
お問い合わせ staff@lrri.or.jp



A green scroll graphic with a white border, featuring a vertical strip on the left side and a small circular detail at the top right corner. The text is centered on the scroll.

メールマガジン
(令和4年度)

◆「LRRRI メールマガジン」 2022 年 7 月号◆

★個人会員のご入会を認めさせていただきました

森 修一様（株）新星コンサルタント、技術士、河川技術がご専門）と小林 諒様（長野計器(株)、モニタリングとセンシングがご専門）が個人会員としてご入会をいただきました。

★「エルリ塾」の受講者と講師を募集します

賛助会員様の要請で、「土と基礎地盤と土構造物」に関する課題に関心を持たれている社員の方々に対して、

- ① 実際のお仕事で困っていることや疑問に思っていることの解決に資する
- ② 各種資格の取得の支援をする

ことを目指した講座 6 月 24 日に終了しました。なお、本件は、委託業務と位置付け、期間は、令和 4 年 1 月から 6 月（合計 9 回）でした。アンケート結果をホームページにアップしますのでご覧ください。なお、令和 4 年度以降については、新たなプログラムとし、「エルリ塾」として、対象も全会員に広げることが令和 4 年度第 1 回理事会（役員会）で決めました。

つきましては、①受講者と②の講師をつとめていただける会員の募集をします。本件に関するアンケート調査を別途行いますのでご回答にご協力ください。なお、講師をお勤め戴ける場合は、「LRRRI 人件費規定」に従って講師料を支払わせていただきます。

★環境省プロジェクト S18 から業務委託を受けています

前回のアンケート調査に引き続き、茨城大学から、環境省プロジェクト S18 に関連する適応策の調査に関する委託を受けています。業務は、茨城大学、国立環境研究所、LRRRI の連携で取り組みます。ご関心のある方は事務局までご連絡ください。

★（一財）土木研究センター「土木技術資料」令和 4 年 7 月号が届いています

（一財）土木研究センター「土木技術資料」令和 4 年 7 月号が事務局に届いています。“流域治水”や“土木研究所第 5 期中長期計画”など興味深い記事が満載です。目次等が必要な会員は、事務局までご一報ください。

★「役員だより」令和 4 年 7 月号を掲載しました

7 月号は安原代表理事が担当致しました。タイトルは「壁」です。令和 4 年度へ向けたメッセージです。ご一読ください。なお、令和 4 年 8 月以降は賛助会員のご投稿も募ります。

★総会を 8 月 24 日に開きます

下記の要領で令和 4 年度 LRRRI 総会を開きます。「ご出席戴く社員」の方には別途ご案内させていただきます。

◆日時 令和4年8月24日（水）13：15－14：15

◆場所 オンライン（Zoom）による

◆議事次第

1. 開 会
2. 代表理事挨拶
3. 定足数の確認
4. 議長選任
5. 資料の確認
6. 議事録作成人並びに署名人の選出
7. 議 案
 - 第1号議案 定款の改正
 - 第2号議案 役員改選
 - 第3号議案 令和3年度活動報告
 - 第4号議案 令和3年度活動計算書報告
(会計監査報告付)
 - 第5号議案 令和4年度事業計画

閉 会

（終了後、「LRRI 交流会」（別途ご案内）があります。併せてご参加ください。）

★「エルリ情報交換会」の話題提供者を募集しています

8月24日予定の総会后、「エルリ情報交換会」を開きます。話題提供いただける方を募集します。1件につき、10分から15分のプレゼンを予定しています。多少の余裕がありますので、ご希望の会員は、様式は自由ですが、①演題、②発表者、③ご所属、④会員種別、⑤発表概要をA4で1ページのWORDファイルにまとめて、事務局までお送りください。8月1日（月）を締め切りとします。

◆「LRRRI メールマガジン」 2022 年 8 月号◆

★賛助会員所有の技術が「ジャパン・レジリエンス・アワード 2022」を受賞されました

賛助会員・メトリー技術研究所(株)様の「D・Box 工法」がジャパン・レジリエンス・アワード 2022 を受賞されました。その表彰式（4 月 27 日）の記事が 8 月 19 日の日経新聞（全国版, PDF 添付）に掲載されました。おめでとうございます。

★賛助会員が特許を取得されました

賛助会員・(株)水戸グリーンサービス様が下記の特許を取得されました。

- ・特許 7053076 アンカー材及び補強土壁
 - ・特許 7109830 盛土補強壁及び盛土補強壁の構築方法
 - ・特許 7109840 盛土補強壁及び盛土補強壁の構築方法
- これらを基礎にした「レックスウォール工法」を開発中です。

★「エルリ塾」の受講者を募集します

令和 3 年度の「グランパカズ塾」に続いて、令和 4 年度は「エルリ塾」として、a. 「基礎地盤・土構造物講座」（「グランパ・カズ塾」PART 2）, b. 「ICRT & DX 講座」を開講します。メール配信いたしますが、詳細は、HP にもアップいたしますのでご覧ください。

★環境省プロジェクト S18 から業務委託を受けています

前回のアンケート調査に引き続き、茨城大学から、環境省プロジェクト S18 に関連する適応策の調査に関する委託を受けています。業務は、茨城大学、国立環境研究所、LRRRI の連携で取り組んでいます。

★（一財）土木研究センター「土木技術資料」令和 4 年 8 月号が届いています

（一財）土木研究センター「土木技術資料」令和 4 年 7 月号が事務局に届いています。“流域治水”や“土木研究所第 5 期中長期計画”など興味深い記事が満載です。目次等が必要な会員は、事務局までご一報ください。

★「役員&会員だより」令和 4 年 8 月号を掲載しました

8 月号は岸田代表理事が担当致しました。タイトルは「『忘れられた日本人』の智慧を信じる」です。含蓄深く興味深い内容です。ご一読ください。なお、賛助会員のご投稿も受け付けています。

★「総会」と「交流会」を 8 月 24 日に開きました

令和 4 年 8 月 24 日（水）に令和 4 年度総会と LRRRI 交流会を開催し、成功裏に終了いたしました。交流会の資料はホームページと「会員専用」欄に保存していますのでご覧ください。

◆「LRRRI メールマガジン」 2022 年 9 月号◆

★（一財）土木研究センター「土木技術資料」令和 4 年 9 月号が届いています

（一財）土木研究センター「土木技術資料」令和 4 年 9 月号が事務局に届いています。本号は，“BIM/CIM に関わる教育機関の現状と課題”など興味深い記事が満載です。目次等が必要な会員は、事務局までご一報ください。

★「エルリ塾」の受講者を募集します（再掲載）

令和 3 年度の「グランパ・カズ塾」に続いて、令和 4 年度は「エルリ塾」として、a. 「基礎地盤・土構造物講座」（「グランパ・カズ塾」PART 2）、b. 「ICRT & DX 講座」を開講します。メール配信いたしましたが、詳細は、HP にもアップしていますのでご覧ください。

★環境省プロジェクト S18 からの委託業務に関するお願いです

茨城大学から環境省プロジェクト S18 に関連する適応策の調査に関する委託を受けておりますが、この中に、LRRRI が所有する技術も取り上げさせていただくことを委託者から了解を得ています。追って別途ご案内のうえ、ご依頼をさせていただきますのでご協力ください。

★共同研究に参加しています

茨城大学様、(株)JSP 様（特別賛助会員）、東亜建設工業(株)様と LRRRI の間で「軽量地盤材料を用いた耐震補強工法の性能評価に関する研究」と題する共同研究を開始しました（期間は、令和 4 年 8 月 31 日から令和 5 年 8 月 30 日まで）。

★賛助会員の試験施工のサポートを行っています（写真）

賛助会員・(株)水戸グリーンサービス様が開発中の「レックスウォール工法」の試験施工が水戸市内で実施されています。ご関心のある方は、(株)水戸グリーンサービス様までご連絡ください。

★顧問をお迎えしました

前・（一財）土木研究センター理事長・常田賢一様を顧問としてお迎えすることを 9 月 21 日の令和 4 年度第 2 回理事会（役員会）で承認いたしました。今後は本法人の業務の一層の推進に尽力いただけることと思います。現在、なおインフラの“性能設計”に関する書籍を LRRRI から出版することを計画中です。詳細は近日中にご案内いたします。

★「役員&会員だより」令和 4 年 9 月号を掲載しました（PDF）

9 月号は安原代表理事が担当致しました。タイトルは「9.11 のこと」です。興味深い内容です。ご一読ください。なお、賛助会員の皆様のご投稿も受け付けています。

◆「LRRRI メールマガジン」 2022 年 10 月号◆

★（一財）土木研究センター「土木技術資料」令和 4 年 10 月号が届いています

（一財）土木研究センター「土木技術資料」令和 4 年 10 月号が事務局に届いています。本号は、“強靱化・持続性・包摂制のある水害対策へ向けて”の特集号です。目次等が必要な会員は、事務局までご一報ください。

★“性能設計”に関する書籍の出版を計画しています

常田顧問（前・（一財）土木研究センター理事長）が、現在、なおインフラの“性能設計”に関する書籍を LRRRI から出版することを計画中です。多くの賛助会員様から広告掲載のご賛同をいただいています。詳細は 11 月 2 日の理事会（役員会）詳細を決めますのでその後再度ご案内いたします。

★「役員&会員だより」令和 4 年 10 月号をお届けします

10 月号は須田副代表理事が担当致しました。タイトルは「多様性の価値について考える」です。示唆に富む興味深い内容です。HP にアップしていますのでご一読ください。なお、賛助会員の皆様のご投稿も受け付けています。ご関心のある方は事務局までご一報ください。

★「エルリ塾」を開講しました

令和 4 年度は「エルリ塾」として、a. 「基礎地盤・土構造物講座」（「グランパ・カズ塾」PART 2）第 1 回目を 10 月 12 日オンラインで開催しました。15 名の方々のご参加です。なお、b. 「ICRT & DX 講座」の開講は、11 月 29 日から開講予定です。プログラムは HP にもアップしていますのでご覧ください。b. 「ICRT & DX 講座」まだ若干の余裕がありますのでご参加ご希望の会員は事務局までご連絡下さい。

★E&E セミナーが開催されます

NPO ブルーアースによる「エネルギー & エコロジーセミナー No.21（防災・2022）」によるセミナーが 11 月 24 日から 12 月 15 日の間、3 回にわたって開催されます。詳細は <https://npo-blueearth.jimdofree.com/> をご覧ください。ご関心のある方は <http://bit.ly/3cqf6JA> からお申し込みください。なお、主催は、特定非営利活動法人 NPO ブルーアース・（一社）地盤品質判定士会神奈川支部・（一社）地域国土強靱化研究所の 3 機関です。

★「第 3 回技術者講座」の開講を計画しています

令 5 年 5 月に、（一財）土木研究センター様と共催で、標記の講座を開講します。総合タイトルは、「インフラ強靱化に関する最近のトピックス」（仮題）の予定です。土木研究センター様から 2 課題、LRRRI から 2 課題提供する予定です。詳細が決まりましたら再度ご案内いたします。“LRRRI から 2 課題”につきまして、自薦・他薦がありましたら事務局までお寄せください。

◆「LRRIメルマガ」2022年11月号◆

★(一社)茨城県建設コンサルタンツ協会様からの委託業務を終了しました

(一社)茨城県建設コンサルタンツ協会様から「外国(ベトナム)人財採用セミナー(2022年11月22日(火) at 茨城県産業会館)」からオンライン会議運営業務を受託していましたが、ベトナムと日本を結ぶオンライン会議のサポートという初めての受託業務にも拘わらず、須田裕之副代表理事と中村健太郎会員のご尽力で、無事終了いたしました。



写真1 セミナー風景(ド・レ・タン・チュイさん(県内コンサルタント勤務)のプレゼン)



写真2 運営業務中の須田副代表理事と中村会員

★“性能設計”に関する書籍の出版を進めています

常田賢一顧問（前・（一財）土木研究センター理事長）が、現在、インフラの“性能設計”に関する書籍「**防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務－個別最適から全体最適に展開－**」をLRRRIから出版することを支援しています。多くの賛助会員様から広告（技術資料）掲載のご賛同をいただいています。令和5年3月出版を目指しています。ご期待ください。

★「役員&会員だより」令和4年11月号をお届けします

11月号は安原代表理事が担当致しました。タイトルは「地盤沈下顛末記」です。興味深い内容です。HPにアップしていますのでご一読ください。なお、賛助会員の皆様のご投稿も受け付けています。ご関心のある方は事務局までご一報ください。

★「エルリ塾」「ICRT & DX 講座」が間もなく開講します

令和4年度は「エルリ塾」として、a.「基礎地盤・土構造物講座」（「グランパ・カズ塾」PART 2）第2回目が11月9日オンラインで開催されました。15名の方々全員がご参加です。なお、b.「ICRT & DX 講座」の開講は、11月29日から開講予定です。プログラムはHPにもアップしていますのでご覧ください。b.「ICRT & DX 講座」まだ若干の余裕がありますのでご参加ご希望の会員は事務局までご連絡下さい。

★気候変動適応策に関する受託業務を進めています

茨城大学から受託した「環境省プロジェクト S18 に関連する気候変動適応策の調査に関する業務」は、関係の皆様のご協力のお陰で、順調に進んでいます。令和5年1月31日に報告書を提出する予定です。ご期待ください。LRRRI 関連技術の集約も行っています。まだ、間に合いますので、該当する技術をご所有の会員におかれましては、事務局までご一報ください。

★E&E セミナーが開催されています(再掲載)

NPO ブルーアースによる「エナジー & エコロジーセミナーNo.21（防災・2022）」によるセミナーが11月24日から12月15日の間、3回にわたって開催されます。CPD ポイント付きですが、無料です。詳細は <https://npo-blueearth.jimdofree.com/> をご覧ください。ご関心のある方は <http://bit.ly/3cqf6JA> からお申し込みください。なお、主催は、特定非営利活動法人NPOブルーアース・(一社)地盤品質判定士会 神奈川支部・(一社)地域国土強靱化研究所の3機関です。

★「第3回技術者講座」を計画中です(再掲載)

令和5年5月に、（一財）土木研究センター様と共催で、標記の講座を開講します。総合タイトルは、「インフラ強靱化に関する最近のトピックス」（仮題）の予定です。土木研究センター様から2課題、LRRRI から2課題提供する予定です。詳細が決まりましたら再度ご案内いたします。“LRRRI から2課題”につきまして、自薦・他薦がありましたら事務局までお寄せください。

◆「LRRIメルマガ」2022年12月号◆

★新入会員をお迎えしました

(株)福山コンサルタント様の大塚宣昭様と浅田寛喜様のお申し込みをいただき、12月19日の第4回理事会（役員会）でご入会を承認させていただきました。

★土木技術資料令和4年12月号が届いています

「流域治水の推進に向けて」の特集号です。「巻頭言」として小池俊雄先生の“流域全体ですべての関係当事者による質の高い社会づくり”の記事が掲載されています。ご関心のある方は、事務局までご一報ください。

★“性能設計”に関する書籍の出版を進めています

常田賢一顧問（前・（一財）土木研究センター理事長）が、現在、インフラの“性能設計”に関する書籍「**防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務－個別最適から全体最適に展開－**」（次ページ表紙参照）をLRRIから出版することを支援しています。多くの賛助会員様に加えて個人会員ご所属の機関からも広告（技術資料）掲載のご賛同をいただいています。令和5年3月出版を目指しています。ご期待ください。

★「役員&会員だより」令和4年12月号をお届けします

12月号は常田顧問に執筆いただきました。タイトルは「新たな方向性を確認したい：個別最適から全体最適へ」です。出版予定の書籍に関連する興味深い内容です。HPにアップしていますのでご一読ください。なお、賛助会員の皆様のご投稿も受け付けています。ご関心のある方は事務局までご一報ください。

★「エルリ塾」は順調です

令和4年度は「エルリ塾」として、a.「基礎地盤・土構造物講座」（「グランパ・カズ塾」PART 2）第2回目が11月9日オンラインで開催されました。15名の方々全員がご参加です。「ICRT & DX 講座」も12月20日に第2回を終了いたしました。プログラムはHPにもアップしていますのでご覧ください。

★気候変動適応策に関する受託業務を進めています

茨城大学から受託した「環境省プロジェクト S18 に関連する気候変動適応策の調査に関する業務」は、関係の皆様のご協力のお陰で、順調に進んでいます。令和5年1月31日に報告書を提出する予定です。ご期待ください。LRRI 関連技術の掲載も計画しています。該当する技術をご所有の会員におかれましては、事務局までご一報ください。

★E&E セミナーが終了しました

NPO ブルーアースによる「エナジー & エコロジーセミナーNo.21（防災・2022）」によるセミナーが11月24

日から12月15日の間、3回にわたって開催され好評裏に終了しました。主催は、特定非営利活動法人NPOブルーアース・(一社)地盤品質判定士会神奈川支部・(一社)地域国土強靱化研究所の3機関でした。

★「第3回技術者講座」を計画中です(再掲載)

令和5年5月に、(一財)土木研究センター様と共催で、標記の講座を開講します。総合タイトルは、「インフラ強靱化に関する最近のトピックス」(仮題)の予定です。土木研究センター様から2課題、LRRRIから2課題提供する予定です。詳細が決まりましたら再度ご案内いたします。

<参考> 出版予定書籍表紙(常田賢一顧問著)

防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務

— 個別最適から全体最適に展開 —



(20221111 時点)

一般社団法人 地域国土強靱化研究所

◆「LRRIメルマガ」2023年1月号◆

★土木技術資料令和5年1月号が届いています

今月は「インフラ DX を支える技術開発」の特集号です。興味深い記事が満載です。ご関心のある方は、事務局までご一報ください。

★“性能設計”に関する書籍の出版を進めています(再掲載)

常田賢一顧問(前・(一財)土木研究センター理事長)が、現在、インフラの“性能設計”に関する書籍「防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務－個別最適から全体最適に展開－」をLRRIから出版することを支援しています。多くの賛助会員様に加えて個人会員ご所属の機関からも広告(技術資料)掲載のご賛同をいただいています。令和5年3月出版を目指しています。ご期待ください。

★「役員&会員だより」令和5年1月号をお届けします

令和5年1月号は安原一哉代表理事に執筆いただきました。タイトルは“「人新世」のはじまり”という視座：令和5年を迎えて」です。念頭に当たっての代表理事の決意が込められています。HPにアップしていますのでご一読ください。なお、賛助会員の皆様のご投稿も受け付けています。

★「エルリ塾」は順調です

令和4年度は「エルリ塾」として、a.「基礎地盤・土構造物講座」第4回目が令和5年1月11日オンラインで開催されました(伴夏男講師担当)。15名の方々全員がご参加です。「ICRT & DX 講座」も12月20日に第2回を終了いたしました。第3回は1月31日の予定です。

★気候変動適応策に関する受託業務を進めています(再掲載)

茨城大学から受託した「環境省プロジェクト S18 に関連する気候変動適応策の調査に関する業務」は、関係の皆様のご協力のお陰で、順調に進んでいます。令和5年1月31日に報告書を提出する予定です。ご期待ください。LRRI 関連技術も掲載しています。

★「第3回技術者講座」を計画中です(再掲載)

令和5年5月に、(一財)土木研究センター様と共催で、標記の講座を開講します。総合タイトルは、「インフラ強靱化に関する最近のトピックス」(仮題)の予定です。土木研究センター様から2課題、LRRIから2課題提供する予定です。詳細が決まりましたら再度ご案内いたします。

★“いざぼうネット”へのリンク付けをしていただきました

常田賢一顧問のご尽力で、LRRIのホームページを土木情報ネット“いざぼうネット”(<https://isabou.net/>)にリンク付けしていただきました。一度ご覧ください。

◆「LRRIメルマガ」2023年2月号◆

★個人会員のお申し込みを戴きました

常田賢一顧問（前・（一財）土木研究センター理事長）から、個人会員のお申し込みをいただき、2月9日（木）の理事会（役員会）で了承されました。

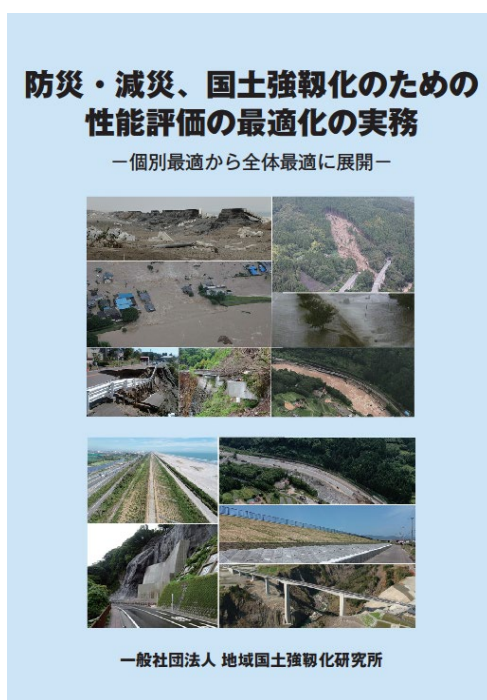
★「土木技術資料」（令和5年2月号）が届いています

興味深い記事が満載です。ご関心のある方は、事務局（staff@lrri.or.jp）までご一報ください。

★“性能設計”に関する書籍の販売を開始します

常田賢一顧問（前・（一財）土木研究センター理事長）著による、インフラの“性能設計”に関する書籍「**防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務－個別最適から全体最適に展開－**」をLRRIから出版します。多くの賛助会員様に加えて個人会員ご所属の機関からも広告（技術資料）を掲載させていただいています。令和5年3月出版予定です。ご期待ください。なお、目次を含めた書籍の概要はHPにも掲載していますのでご一読ください。

【新刊書の御案内（表紙）】（再掲載）



★「役員&会員だより」令和5年2月号をお届けしました

令和5年2月号は小浪岳治理事に執筆いただきました。タイトルは『防衛予算から考える「このくにのかたち」』です。皆様が共通して抱かれている思いが強く伝わってくる内容です。HP（<https://lrri.or.jp/>）に

もアップしていますので是非ご一読ください。なお、賛助会員・個人会員の皆様のご投稿も随時受け付けています。

★「エルリ塾」は順調です

令和4年度は「エルリ塾」として、a.「基礎地盤・土構造物講座」第5回目が令和5年2月8日オンラインで開催されました（演題：「インフラストラクチャのモニタリング」、丸山 泉講師担当）。15名の方々全員がご参加です。第5回目は3月8日です（演題：「地盤と構造物の支持力と沈下」、安原一哉講師担当）。「ICRT & DX 講座」も1月31日に第3回（演題：「要素技術各論(1)：データベース技術と空間情報」、中村健太郎講師）を終了いたしました。第4回（演題：「要素技術各論(2)：ネットワーク技術と情報プラットフォーム」、須田裕之講師担当）は2月28日の予定です。

★気候変動適応策に関する受託業務が終了しました

茨城大学から受託した「**環境省プロジェクト S18 に関連する気候変動適応策の調査に関する業務**」は、関係の皆様のご協力のお陰で、順調に進み、去る令和5年1月31日に「報告書」を提出しました。「報告書」以外に以下のものを提出しています。

- ・「個票」：我が国における、中央政府、地方自治体及び民間事業者による気候変動適応策に関する484件の施策や技術が紹介されています。（分析対象は、442件ですが、LRR分6件を含めて合計448件が紹介されています。）
- ・「適応策一覧表」：「個票」の内容を示すデータベースの形になっています。
- ・「追記集」：集約した政策や技術のうち、特記すべきもの37件を選び、「個票」の内容より少し詳しく紹介しています。

なお、本件の成果を4月以降に、委託戴いた三村信男茨城大学名誉教授が代表を務めておられる環境省 S18 プロジェクト (<https://s-18ccap.jp/>) のコアメンバーの方々に内容を紹介し、議論をさせて頂く予定です。その後、LRR分会員の方々にもご紹介する予定です。ご期待ください。

★「第3回技術者講座」を計画中です

令和5年5月18日と25日に、（一財）土木研究センター様と共催で、標記の講座を開講します。総合タイトルは、「インフラ強靱化に関する最近のトピックス」の予定です。土木研究センター様から2課題、LRR分から2課題提供する予定です。詳細が決まりましたら再度ご案内いたします。

★地盤品質判定士会神奈川支部様が土木学会メンテナンス賞を受賞！

本年2月20日付けで、土木学会2022年度インフラメンテナンス賞の発表がありました。その中に、本法人と共に「E&E・防災セミナー」を主催するなど関係が深い（一社）地盤品質判定士会 神奈川支部（代表 立花秀夫支部長）が、自治体と連携した「宅地地盤相談会」や市民参加型の「防災セミナー」等により、インフラメンテナンス チャレンジ賞に選出されました。

(<https://inframaintenance.jsce.or.jp/hyousyou/announcement2/>)

◆「LRRIメルマガ」2023年3月号◆

★「土木技術資料」(令和5年3月号)が届いています

興味深い記事が満載です。以下のURLから抄録がご覧になれます。

https://www.pwrc.or.jp/shouroku/shouroku_2023.html#h230301

★“性能設計”に関する書籍の販売を開始しました

常田賢一顧問（前・（一財）土木研究センター理事長）著による、インフラの“性能設計”に関する書籍「**防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務－個別最適から全体最適に展開－**」をLRRIから出版しました。多くの賛助会員様に加えて個人会員ご所属の機関からも広告（技術資料）を掲載させていただいています。ご注文は下記からお願いします。

◎注文窓口：東京官書普及（株）

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-2 TEL：03-3292-3701

URL：http://www.tokyo-kansho.co.jp 土木関係専門書籍販売サイト シビル Books

地域国土強靱化研究所書籍販売サイト[東京官書普及（株）](tokyo-kansho.co.jp)

なお、一部の会員様から、会員割引はないのかとお尋ねがありましたが、代表理事の判断で以下のようにさせていただきますのでご理解とご協力を切にお願いいたします。

・本出版物は内容の質、頁数の割合に極めて廉価に抑えていますので、会員の皆様には、定価販売させていただくことのご理解をお願いいたします。

・ただし、会員が一括して20部以上お買い上げの際は、エルリから5%のキャッシュバックが受けられます。東京官署への購入申込み書の写しをご提出ください。

* 関連して、常田顧問から寄稿された、「東日本大震災の復興により津波に備える沿岸陸域の姿から学ぶ－津波災害から12年を経て－」もHPに掲載していますのでご一読下さい。

★「役員&会員だより」令和5年3月号をお届けしました

本メルマガに先立ってすでに会員の方々にはお届けした「飛ぶ教室：あれから12年」（代表理事執筆）は、HPに掲載されていますのでご一読ください。急ぎましたのは、忘れてはならない2011.3.11から、12年を経過した3月11日が念頭にあったためです。

★「エルリ塾」は順調です

令和4年度は「エルリ塾」として、a.「基礎地盤・土構造物講座」第6回目が令和5年3月8日オンラインで開催されました（演題：「地盤と構造物の支持力と沈下」、安原一哉講師担当）。15名の方々全員がご参加です。第7回目は4月12日です（演題：「擁壁の安定」、西村真二講師担当）。「ICRT & DX 講座」も2月28日に第4回（演題：「要素技術各論(2)」、須田裕之講師担当）を終了いたしました。第5回（演題：「要素技術各論(3)」、須田裕之講師担当）は3月28日の予定です。

★「第3回技術者講座」のプログラムが決まりました

令和5年5月18日と25日に、(一財)土木研究センター様と共催で、標記の講座を開講します。総合タイトルは、「インフラ強靱化に関する最近のトピックス」の予定です。土木研究センター様から2課題、LRRRIから2課題提供する予定です。概要は下記の通りです。申込案内他の詳細はHPにアップしていますのでご覧ください。

～ご案内～



「第3回技術者講座」のご案内



◆講座名:

「インフラ強靱化に関する最近のトピックス」

◆日程など

1. 日時 令和5年5月17日(水) 13:30～16:50 及び
令和5年5月24日(水) 13:30～16:50 計2回
2. 方法 オンサイトとオンライン(Zoom使用)とのハイブリッド
3. 場所 (一社)茨城県産業会館 (www.is-kaikan.or.jp) 研修室
〒310-0801 茨城県水戸市桜川2丁目2-35 電話: 029-227-7121
4. 主催 (一財)土木研究センター (www.pwrc.or.jp)
(一社)地域国土強靱化研究所 (<https://lrrri.or.jp>)
5. 共催 地盤工学会関東支部(依頼中)
6. 後援 土木学会関東支部茨城会
(一社)茨城県建設コンサルタント協会
日刊建設工業新聞社
7. CPD 地盤工学会または土木学会から賦与(一回3時間として3x2=6ポイント)

◆プログラムとスケジュール

★第1回【5月17日】13:30～16:50

- ・13:30～13:40 開会あいさつ
- ・13:40～14:40 トピック(1)「橋梁定期点検を支援する事例解説集」
講師:(一財)土木研究センター 材料・構造研究部長 落合 盛人
<14:40～14:50> 休憩
- ・14:50～16:20 トピック(2)「防災・減災、国土強靱化のための性能評価の姿勢&視点」
講師:(一財)土木研究センター顧問&LRRRI顧問 常田賢一
- ・16:20～16:50 質疑応答

★第2回【5月24日】13:30-16:30

- ・13:30-14:30 トピック(3) 「全国道路施設点検データベース(土工)」
講師：(一財)土木研究センター 土工データベース情報管理室長 井手 統一
<14:30-14:40> 休憩
- ・14:40-16:10 トピック(4) 「インフラメンテナンスに貢献する宅地地盤相談
ー神奈川の活動事例ー」
講師：(一社)地盤品質判定士会 神奈川支部長 立花秀夫
- ・16:10-16:40 質疑応答
- ・16:40-16:50 閉会挨拶

◆テキスト(配布資料)

- ・トピック(2): 常田賢一著「防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務
一個別最適から全体最適に展開ー」(編集・発行：(一社)地域国土強靱化研究所)
- ・トピック(1), (2), (3), (4): PPT 資料 (事前に, WEB 上で配信)

◆参加料(テキスト代を含む。申込時一括支払い):

- ・会員：5,000 円 学生は半額 (2,500 円)
(ここでいう会員とは、地盤工学会会員、土木学会会員、(一社)茨城県建設コンサル
タツツ協会、(一財)土木研究センター賛助会員、(一社)地域国土強靱化研究所会
員を指すものとします)
- ・非会員：7,000 円
(* 予定参加者数は、オンサイト：30 名迄、オンライン：170 名迄)


<振込先> (期限：令和5年5月8日(月)まで)

- ・銀行名：常陽銀行 大穂支店 普通 1181113
- ・名義人：一般財団法人土木研究センター

◆お申し込み先:(期限:令和5年5月8日(月)まで)

- ・URL からの申し込み
(一財)土木研究センター e-mail: mail@pwrc.or.jp
- ・別紙申込用紙に記載の上, PDF 版を e-mail にご送付願います。

◆お問い合わせ先:

- ・一般財団法人 土木研究センター 技術研究所 庶務・広報部 米川、木本
TEL: 029-864-2521 e-mail: mail@pwrc.or.jp または
- ・一般社団法人 地域国土強靱化研究所 事務局 米川 
携帯(安原): 090-2639-5174, e-mail: staff@lrri.or.jp

(@以下4文字は、小文字で、エル(l)・アール(r)・アール(r)・アイ(i))

◆「LRRI メルマガ」 2023 年 4 月号◆

★「土木技術資料」(令和 5 年 4 月号)が届いています

興味深い記事が満載です。以下の URL から抄録がご覧になれます。

https://www.pwrc.or.jp/shouroku/shouroku_2023.html#h230301

★入会のご応募をいただきました

末次忠司様（技術士（建設），博士（工学））から個人会員のご応募があり，4月5日の理事会（役員会）で了承されました。なお，年度途中でもありますので，正式なご入会の承認（会費の納入依頼など）は，7月1日とさせていただきます。なお，ご専門は，河川関係やリスク管理です。

★「役員 & 会員だより」令和 5 年 3 月号をお届けします

3月号は，「地震と油断を考える」と題して，岡本理事に執筆いただきました。防災・減災に不可欠な“わがこと化”に関するご提案が含まれています。HPにも掲載されていますのでご一読ください。

★内閣府からインタビュー（オンライン）を受けました

3月22日に内閣府社シス・企画・新しい資本主義実現本部事務局から，「社会資本整備について」に関するヒアリングを受けました。国土強靱化を含めて LRRI としての考え方を示したつもりですが，課題が大きすぎるため，茨城大学の助言も含めて，代表理事が対応させていただきました。ただ，代表理事としての考えと，会員の皆様のお考えが整合していない可能性もあることを危惧しております。アリング資料をホームページの会員専用欄に掲載いたしますので，ご一読のうえ，ご意見をお寄せください。

★「DX 部門設置準備会」の参加者を募集します

4月5日の理事会（役員会）で標記の準備会を設置することが決まりました。4月末に本件に関するアンケートが google form で届くと思いますので，ご回答にご協力ください。

★「エルリ塾」は順調です

令和4年度は「エルリ塾」として，a. 「基礎地盤・土構造物講座」第7回目が令和5年4月12日オンラインで開催されました（演題：「宅地擁壁」，西村真二講師担当）。15名の方々全員がご参加です。第8回目は5月12日です（演題：「地盤改良・補強」，岸田隆夫講師担当）。「ICRT & DX 講座」も3月28日に第回（演題：「要素技術各論(2)」，須田裕之講師担当）を終了いたしました。第6回（演題：「インフラ分野における DX システムの考え方」，玉井久嗣講師担当）は4月25日の予定です。

★“性能設計”に関する書籍をご案内下さい

先に出版致しました，常田賢一顧問著「防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の

実務－個別最適から全体最適に展開－のご注文は下記からお願いします。

◎注文窓口：東京官書普及（株）

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-2 TEL：03-3292-3701

URL：http://www.tokyo-kansho.co.jp 土木関係専門書籍販売サイト シビル Books

地域国土強靱化研究所書籍販売サイト「東京官書普及（株）」(tokyo-kansho.co.jp)

なお、会員の皆様が一括して20部以上お買い上げの際は、エルリから5%のキャッシュバックが受けられます。その際に、東京官署への購入申込み書の写しをご提出ください。

★「第3回技術者講座」の参加者をお待ちしております

令和5年5月18日と25日に、（一財）土木研究センター様と共催で、標記の講座を開講します。総合タイトルは、「インフラ強靱化に関する最近のトピックス」です。詳細は下記をご参照ください。

◆お申し込み先：(期限:令和5年5月8日(月)まで)

・ URL からの申し込み

（一財）土木研究センター e-mail：mail@pwrc.or.jp

・ 別紙申込用紙に記載の上、PDF版を e-mail にご送付願います。

◆お問い合わせ先：

・ 一般財団法人 土木研究センター 技術研究所 庶務・広報部 米川、木本

TEL：029-864-2521 e-mail：mail@pwrc.or.jp または

・ 一般社団法人 地域国土強靱化研究所 事務局 米川

携帯（安原）：090-2639-5174, e-mail: staff@lrri.or.jp



(@以下4文字は、小文字で、エル(l)・アール(r)・アール(r)・アイ(i))

◆「LRRI メルマガ」 2023 年 5 月号◆

★「土木技術資料」(令和 5 年 5 月号)が届いています

以下の URL から抄録がご覧になれます。

<https://www.pwrc.or.jp/wnew2305.html#mokuji>

“グリーンを推進する水環境研究・技術開発”の特集号です。ご一読ください。

★「役員 & 会員だより」令和 5 年 5 月号をお届けしました

4 月号は、最近話題の「Chat GBT」に関する内容です。安原代表理事に執筆いただきました。HP にも掲載されていますのでご一読ください。

★「DX 部門設置準備会」の参加者を募集します

4 月 5 日の理事会（役員会）で標記の準備会を設置することが決まりました。4 月末に本件に関するアンケートが google form で届くと思いますので、ご回答にご協力ください。

★「エルリ塾」は順調です

令和 4 年度は「エルリ塾」として、a. 「基礎地盤・土構造物講座」第 7 回目が令和 5 年 4 月 12 日オンラインで開催されました（演題：「宅地擁壁」, 西村真二講師担当）。15 名の方々全員がご参加です。第 8 回目は 5 月 12 日です（演題：「地盤改良・補強」, 岸田隆夫講師担当）。「ICRT & DX 講座」も 4 月 25 日に第 6 回（演題：「インフラ分野における DX システムの考え方」, 玉井久嗣講師担当）を終了いたしました。第 7 回（演題：「インフラ分野における DX の取り組み（1）」, 山田岳峰講師担当）は 5 月 30 日の予定です。

★「第 3 回技術者講座」が終了しました

令和 5 年 5 月 17 日と 24 日に、（一財）土木研究センター様と共催で、標記の講座を開講しました。総合タイトルは、「インフラ強靱化に関する最近のトピックス」でした。66 名のご参加をいただきました。

★創設 3 周年記念フォーラムを開きます

本法人は令和 5 年 7 月 1 日をもって設立 4 年目に入りますが、3 周年を記念して、三村信男・茨城大学名誉教授（前・茨城大学学長）をお迎えして別紙のようなフォーラムを開催いたします。ご参加をお待ちしております。

★令和 5 年度総会 & 交流会を開催します

来る 8 月 30 日（水）に令和 5 年度総会 & 交流会を開催する予定です。詳細は、6 月末にご案内いたします。交流会はオープン参加（非会員の参加も可）とします。

◆「LRRIメルマガ」2023年6月号◆

★「土木技術資料」(令和5年6月号)が届いています

以下のURLから抄録がご覧になれます。

<https://www.pwrc.or.jp/wnew2306.html#mokuji>

“交通インフラ”を中心としたの記事が満載です。ご一読ください。

★「役員&会員だより」令和5年6月号をお届けします

6月号は、田中理事に執筆いただきました。全国民を熱狂させたWBCを含む野球の話題です。HPにも掲載しますのでご一読ください。

★「エルリ塾」は順調です

令和4年度は「エルリ塾」として、a.「基礎地盤・土構造物講座」第8回目は5月12日（演題：「地盤改良・補強」、岸田隆夫講師担当）第9回目は6月14日（演題：「地盤環境対策；土壌汚染と廃棄物」、小林 薫講師担当）に終了いたしました。第10回目は、6月28日（演題：「技術者倫理」、岸田隆夫講師担当）に実施予定です。また、「ICRT & DX 講座」も5月30日に第7回（演題：「インフラ分野におけるDXの取り組み（1）」、山田岳峰講師担当）を終了いたしました。第8回（演題：「インフラ分野におけるDXの取り組み（2）」、黒木 幹講師担当）は6月27日の予定です。

★創設3周年記念フォーラムを開きます（再掲）

本法人は令和5年7月1日をもって設立4年目に入りますが、3周年を記念して、三村信男・茨城大学名誉教授（前・茨城大学学長）をお迎えして別紙のようなフォーラムを開催いたします。ご参加をお待ちしております。

★令和5年度総会&交流会を開催します

来る8月30日（水）に令和6年度総会&交流会を開催する予定です。詳細は、近日中にご案内いたします。交流会はオープン参加（非会員の参加も可）とします。

(一社) 地域国土強靱化研究所「創設3周年記念フォーラム」のご案内

～「脱炭素社会と建設関連分野の役割」～

代表理事 安原 一哉
副代表理事 岸田 隆夫
副代表理事 須田 裕之

2020年7月1日、地域から国土の強靱化を展開していくことを目的にして創設されました一般社団法人「地域国土強靱化研究所(LRRI)」は、新型コロナウイルスのパンデミックに遭遇する困難な中でも、皆さまのご理解とご協力によって着実に活動し、成果を構築することができました。

4年目の冒頭に当たり、この3年間を省みると共に、とりわけ“気候変動”を念頭に置いた“脱炭素社会”形成に資するための今後の技術や施策の展開を期して、下記の通り、7月7日(金)、講師に三村信男茨城大学名誉教授(茨城大学前学長)をお迎えして、会場とオンラインによる“ハイブリッド形式”で「創設3周年記念フォーラム」を開催いたします。

会員、および関係者の皆さま(非会員も歓迎です)のご参加をお待ちいたしております。

記

◆日時 : 2023年(令和5年)7月7日(金)(14:20~16:50)(受付開始14:10)

◆参加形式 : 会場とオンラインの併用による“ハイブリッド形式”

・(会場) 茨城大学駅南サテライト <https://www.ibaraki.ac.jp/generalinfo/campus/ekinan/index.html>
(茨城県産業会館(茨城県水戸市桜川2-2-35)2F)

・オンライン参加の場合は、後日、お申込みの方にZoomのURLをお送りします。(通信開始14:15)

◆参加料 : 無料

◆プログラム(司会:副代表理事・岸田隆夫):

①記念講演(60分):(オンライン講演者:三村信男 茨城大学名誉教授)

演題:「脱炭素社会に向けた建設関連分野の役割」

②話題提供(40分):“脱炭素社会に向けた取り組みに関する話題”

- 1) (一社)LRRI(元・国交省&山梨大学)末次忠司 「気候変動に対する流域治水」
- 2) 榊福山コンサルタント 大塚宣昭 「グリーンインフラを活用した低炭素まちづくり」
- 3) 飛鳥建設(株) 沼田淳紀 「木材の緩和策への利用」
- 4) 鹿島建設(株) 山田岳峰 「カーボンネガティブと地域の防災・減災対策」

*講演と話題提供の資料は、事前にご参加予定の皆様に配信させていただきます。

③ディスカッション(50分)(司会:代表理事・安原一哉)

◆共催:地盤工学会関東支部

◆後援:(一社)茨城県建設コンサルタント協会、茨城県地域気候変動適応センター、(一財)土木研究センター、(一社)GLOSS研究会

◆CPDポイント:地盤工学会関東支部から2.5ポイント賦与されます。

◆参加のお申込み:ホームページ(<https://lrri.or.jp/>)からか、右記二次元コード(<https://forms.gle/AEvKYJdKWSk6VuDa8>)からお申し込みください(締切り6月26日(月))。

【お問合せ先】LRRI(<https://lrri.or.jp/>)事務局: staff@lrri.or.jp 米川恭子



以上

A green scroll graphic with a white border, featuring a vertical strip on the left side and a small circular detail at the top right corner. The text is centered on the scroll.

会員&役員だより
(令和4年度)

壁：令和4年度の念頭に当たって

振り返ってみますと、長い人生の間いくつかの壁に遭遇してきましたが、超えたいけど越えられない壁もありました。「壁」といいますとすぐ思い浮かぶのは、古くは井上靖の「氷壁」（新潮社、1963）、比較的新しいところでは、養老孟司先生の「バカの壁」（新潮社、2003）があります。

個人的には、「壁」といえばすぐ思い出しますのは、現役の時に、研究室内でスタッフや学生さんとランディ・パウシュ著の「最後の授業」（The Last Lecture, 矢羽野 薫訳, ランダムハウス講談社, 2008）を話題にしたことです。その書籍の中に次のような言葉があります。

レンガの壁がそこにあるのには、理由がある。
僕たちの行く手を阻むためにあるのではない。
その壁の向こうにある「何か」を自分がどれほど真剣に望んでいるか、
証明するチャンスを与えているのだ。

なかなか含蓄のあるメッセージで今でも著者にとっては新鮮な“珠玉の言葉”として心に残っています。ランディ・パウシュは、バーチャルリアリティの権威で米・カーネギーメロン大学教授でしたが、2008年7月に47歳の若さですい臓がんで逝去しました（下記、朝日新聞記事参照）。その前年の2007年9月に400名の聴衆の前で最後の授業を行ったのですが、3人の子供へのメッセージを含めた感動的な講義でした（書籍に付属するCDによる）。



朝日新聞
(2008年7月27日
朝刊)による

一方、最近、ベストセラーになっている「80歳の壁」（和田秀樹著、幻冬舎新書、2022）を読みました。高齢者医療の専門家の立場から、専門医が高齢な患者に施す治療に対して多くの間違いがあると指摘されていて、説得力のある内容になっています。曰く、「いやなことはやらずに、好きなことをやれ」、「健康診断は無駄」、「免許証返納の必要はない」などなど、悩む高齢者が快哉をさけびそうなフレーズがちりばめられています。ランディ・パウシュのいう壁は、超えられるか超えられないかわからない壁ですが、今77歳の筆者にとってここで言う“80歳の壁”は少なくとも筆者にとっては、どうしても乗り越えなければなりません、それには理由があります。

2010年の3月、茨城大学退職の折に最終講義をさせていただきましたが、その時、人生には三つのヤマがあって、最後のヤマは、“65歳から85歳”までというお話をさせていただきました。言ったことに責任を持つという立場からは、この80歳の壁は越えなければならないのです。そして、わが（一社）LRIIはここを乗り越えて継続していかなければなりません。

最後に、直接には“壁”という言葉は出てきませんが、関連のあることをご紹介します。畏友・了戒公利博士（（一財）土木研究センター専門調査役）が6月25日に開催した第2回「技術者講座」（（一財）土木研究センターと共同主催）の講演の最後に次のような漢詩を紹介していただきました。

還暦少年破冬眠

古希青年浴春光

喜寿壮年如夏山

米寿高年似秋天

白寿聖年化神人

（松室猛氏による）

“白寿（99歳）となって神と化す”とまではとても至らないだろうと思いますが、困難な課題を抱えつつある地域社会に少しでも貢献できるLRIIらしい新たな技術と方策を皆様とご一緒に探求してまいりたいと思います。ご賛同いただければ大変幸いです。

幾重にも なんと気づかず 超えてきた

あの壁 この壁 バカの壁

（令和4年7月12日、代表理事 安原一哉）

『忘れられた日本人』の智恵を信じる」

「遊行者」の系譜—行基から宮本常一へ—

名前をどなたもご存じの「行基(668-749)」は、奈良東大寺の大仏さまを造営した立役者です。晩年には、我が国の最初の「大僧正」に任命されています。しかし、行基は壮年期、『平地』を遊行して民衆へ布教活動する傍ら、橋・道・池・用水路などの土木工事を中心とした社会事業を進めて、「菩薩」と崇められる程、多くの民衆の尊崇を集めました。晩年には、東大寺の「勸進僧」として、造営工事を手配すると共に、全国を募金活動に歩き廻りました。

遊行した僧(聖)としては、「市聖(いちのひじり)」と言われた「空也(903-972)」や、「遊行上人(ゆぎょうしょうにん)」、「捨聖(すてひじり)」と言われた「一遍(1239-1289)」が、民衆から強く支持を得ました。僧俗の範疇を超えて遊行した存在としては、「遁世聖」と言われた「西行(1118-1190)」や「俳聖」と言われた「松尾芭蕉(1644-1694)」が挙げられます。更に、遊行者として、全国に木彫りの仏像を残した「円空(1632-1695)」、江戸後期の旅行家、博物学者である「菅江真澄(1754-1829)」も忘れられない存在です。

「遊行」と「巡礼」

上記では、余り使われない「遊行」の言葉を用いましたが、「巡礼」はしばしば耳にします。霊場巡礼では、四国遍路八十八ヶ所巡り(約 1,200~1,400km)や西国三十三所巡り(約 1,000km)が有名です。海外でも、フランスを起点にスペインの北部を巡る「サンティアゴ・デ・コンポステーラ(約 800km)」があります。巡礼のシンボルであるホタテ貝を首に提げ、または、水筒代わりにひょうたんを持って歩きます。巡礼証明書(コンポステラーノ)を得るためには、徒歩 100km 以上、自転車なら 200km 以上との条件があります。自分の脚で歩くことが重視されていることが分かります。いずれの巡礼も、概略のスケジュールの下で宗教上の聖地を順路に従って巡ります。参加者にとって観光的な要素も多分に含まれています。

一方、「遊行」は、私度僧や聖と呼ばれた民間宗教流布の担い手で、仏教の儀礼や教義を普及する半僧半俗の宗教者が大半を占めて、ルート計画を殆ど立てずに各地を巡り歩くものです。知識人として農作物・食文化の普及や寺の建設など地域文化の発展に貢献しました。

『忘れられた日本人』の著者 宮本常一

そして、『忘れられた日本人』の著者で、明治・大正・昭和と生き抜いた民俗学者、農村指導者、社会教育家の「宮本常一(1907-1981)」を、遊行者の系譜の最後に位置づけたいと思います。民間伝承を採取する仕事で全国を歩き回り、年 200 日のフィールド調査を続け、生涯では 16 万 km 地球 4 周分を殆ど徒歩で踏破し、3 千以上の村を訪れ、1 千軒を超える民家に泊まり、古老と話し込み、記録しました。

著書には、古老の話として、①周防大島出身の漁民梶田富五郎翁による対馬浅藻(あざも)での築港譚、②同じく周防大島出身の大工増田伊太郎翁による萩・山口での奇兵隊の経験談、③河内・滝畑の左近熊太翁による鳥羽伏見の戦や西南戦争での経験談、④島根県邑智(おうち)郡の農政家田中梅治翁の稲作指導談など、自ら直接聞き取った結果が記述されています。これらの古老に共通するのは、若い頃には奔放な旅や生活体験を持ち、独自の視座から文化に広く

精通して、良い意味の好奇心を持ち続けていることです。村人からは、世間師(しよけんし・せけんし)として尊重される存在です。

宮本常一自身が、立派な世間師として、離島や部落問題等に取り組みました。その成果として、佐渡・小木の太鼓(おんでこ)座、山口・光の周防猿まわし、佐渡・海府の裂(さき)織りの伝承(相川郷土博物館)などを挙げるすることができます。

双方の経験・智恵を大切に作る習慣

同著書には、こうした『世間師』の体験談に加えて、対馬の2つの集落伊奈と千尋藻(ちろも)での「寄りあい」について記述されています。そこでは、集落の総代たちが結論を急がず、長い時間を掛けて自由に発言して、それを良く聴いて合意形成を図ります。学術的には留保点があるようですが、こうした土着の「寄合民主主義」に流れる「時間を掛けて自由に発言し合い、結論を導く風習」は、私たちも大事にしたいものです。

相手の意見を敬意を持って聴く姿勢は、いつの世でも大切ですが、その意見の裏にある貴重な経験とそれによって育まれた智恵に目を向けたいものです。そのためには、いくつになっても衰えぬ好奇心を持ち続け、自らの脚で歩き回り、「世間師」を見つけて直接話を聴き、貴重な情報を自分の五感で受け止めることが重要だと思います。宮本常一によって1967年に日本観光文化研究所から創刊された雑誌名「あるくみるきく」に端的に示されています。

私たちの地域国土強靱化研究所(LRRI)の活動に当たっても、ともすると「忘れられてしまいかねない方々(老若男女・日本人を問いません)」の経験と智恵を信じて、できる限り正確な情報を集めて、丁寧に時間を掛けて意見を出し合い、その意見に良く耳を傾けて、より理に適った選択肢を見つけて、前に進んで行きたいものです。

以上、2020.8.4 記

岸田隆夫(副代表理事)

9.11 のこと

9 月 11 日は 2001 年のアメリカ同時多発テロ事件以来、世界中の人にとって忘れられない日となってしまいました。この事件以来世界は急速に変化していったように思えます。何の根拠もないのですが、“ロシアのウクライナ侵略もこの辺の混乱に端を発しているように見えます”というのは、穿ちすぎでしょうか？いずれにせよ人類は、特に為政者の判断で戦いを繰り返し、常に市民が犠牲を強いられてきていますが、人類の危機とも思えるような事態に対して、市民として何もできないことに苛立ちを覚えるのは筆者一人ではないことと想像しています。どうして狂気の沙汰としか思えないようなことを人間は繰り返すのか？という疑問が解けません。

良く知られていますように、スイス生まれの哲学者・ジャン＝ジャック・ルソーは、『狂人の世界で「正気」であるということは、それ自体が狂気なのだ。』という名言を残していますが、今回の戦争はまさにそれに該当する事態だと思うのですがどうでしょうか？

さて、上記の事実とは無関係ですが、実は 9 月 11 日は筆者の誕生日です。多くの人の記憶に残る日が誕生日とは喜んでいいのか悲しんでいいのか、今となっては良くわかりません。大きな声では言えませんが、少なくとも Happy birthday! とは言ってほしくないという気がしていました。ただ、今年の 9.11 は少し事情が違っていました。

筆者は茨城大学が幹事校を務めている「日越大学」(VJU, <https://vju.ac.vn/>) の「気候変動・開発プログラム」(MCCD)で“気候変動災害リスク管理”という講義を分担で担当していますが、第 1 期の MCCD 修了生（修士課程）の数名の OB & OG が日本の大学院で学び、民間企業で仕事をしています。そのうちの 3 名の OG には、LRRI・岸田副代表理事が関わっておられる NPO ブルーアース様が開いていただいたオンライン講話「ベトナム交流譚」（令和 4 年 6 月 25 日）に参加して、筆者の思い出話を聞いてもらいました。司会者の方の手際がよかったこともありまして講話後には積極的な質疑があって楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

実は、これには後日談がありまして、上記のオンライン講話に出席していた茨城県内のコンサルタントに勤務している OG の一人が同僚のベトナム人女性を連れ立って、令和 4 年 9 月 11 日に水戸のベトナム料理店でバースデイランチに家内と一緒に招待してくれました。久しぶりにベトナムのヌードル“ホー”とベトナム式コーヒー（コンデンスミルクと濃いコーヒーを混合したもの）を楽しむことができました。なぜか懐かしい味でした。というのも、過去 20 年の間、毎年のようにベトナムを訪問していた筆者でしたが、ここ数年はコロナ禍や自身の病気もあって訪越できなくなっていました。そのせいもありまして、今回の思いがけないイベントは何とも知れない嬉しさと感謝で一杯でした。併せて、一市民としてはこういうことを通じてしか、国際的な相互理解を進めることはできないのだと、つくづく思っているところです。

“神仏が おわすというなら 啓示あれ

この混沌を いかに対すべき”

(令和 4 年 9 月 22 日、代表理事・安原一哉)

多様性の価値について考える

最近よく聞かれるキーワードとして、「共生社会」、「ダイバーシティ」がある。私の活動の一つに ICRT 活用による障害者支援とその普及がある。エルリでの活動の中でも、防災・減災を考える上で、要支援者（要配慮者）に関わるテーマを進めている。日本福祉のまちづくり学会での情報コミュニケーションに関わる研究会、成田国際空港における UD（ユニバーサルデザイン）推進委員会での活動があったからか、以前総務省・厚労省主管の「デジタル活用共生社会実現会議」傘下の部会に参加させていただいたことがある。一般的には「共生社会」と言った場合、障害者基本計画の制定のもとで、人権尊重の立場から「国民誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う社会」を示しており、このような「共生社会」は、国民一人一人がそれぞれの役割と責任を自覚し、主体的に取り組むことによりはじめて実現できるものとしている。これまで高齢者、障害者および外国人等様々な態様、環境にある方々を対象として、いわゆる健常者と対比することによって、この「共生社会」の実現が語られてきた。最近まで、人種、性別、出身地域等においてもその差別的考え方があり、日本的文化から「人権」という考え方が希薄であったことは否めない。欧米からかなり遅れることになったが、グローバル化によって法制度を含め社会的に認知、理解されるようになってきた。社会を構成する多様な人々が互いに尊重し、その個性を活かすことができる環境ができ、それぞれの立場に立った意見、考えを取り入れることにより、将来に向けた「持続可能な社会」が実現できるものと思っている。

そのような中、「多様性の科学」〔副題：画一的で凋落する組織、複数の視点で問題を解決する組織〕（注）という書物を手にした。多様性の価値を組織マネジメントまでにブレークダウンしたものである。「不確実性の社会」、「変化の時代」そして「イノベーションの期待」に向けた組織のあり方について、『自分とは異なる人々と接し、馴染みのない考え方や行動に触れる価値』について言及している。多様性が組織の知性を高め、知識を共有することによって「個人主義」から「集合知」を生み出し、複雑化していく世界で生き残る術があるとしている。また、日常的に「多様性」を取り込むためのヒントとして、①「無意識のバイアス」を取り除く、②陰の理事会（Shadow Board）の活用、③与える姿勢（giver）を挙げている。また、多様性としていわゆる「人口統計学的多様性」（人種・性別・年齢等の違い）だけでなく、「認知的多様性」（ものの見方や考え方、文化的な違い）についても考慮しなければならないとした。

多様性を尊重し、理解し、それを社会・企業活動に反映させることは、画一的視点から生まれる油断や死角、盲点から守ることができ、さらに「情報の水平伝播」によって「集合知」が形成され、新しいアイデアやイノベーションを生み出すことができる。ただ、「多様性」を取り入れる際に、数と多様性の逆説的結果が生じることも注意しなければならない。組織規模が大きくなるにつれ、より多様性のある構成が可能となるが、逆に自分の考え方や行動が似ている者同士が結びつく可能性が大きくなる場合がある。大企業がこの状況に陥る可能性もあり、社会制度への適用となるとさらに顕著であるかもしれない。平均値の落とし穴に陥ることなく、これまでの規格化、標準化やガイドラインについても、多様性との両輪として捉え、それぞれに応じた環境、条件下での適用、多様性とのバランスによって見直す必要があるのではとも考えている。

（注）「多様性の科学」 マシュー・サイド著 （2021）（株）ディスカヴァー・トゥエンティワン発行

“Design for All” と “Design for Each” との兼ね合いに想いを馳せながら・・・

副代表理事 須田裕之（令和4年10月23日）

「地盤沈下」顛末記

令和 4 年 7 月の後半、BS 朝日の記者の方から、“地球クライシス”という番組の中で「渇水と地盤沈下」をエピソードの一つとして取り上げたいので意見を聞かせてほしいという電話がかかってきてオンラインで取材を受けました。そのとき、改めて確認したのは、研究と称していろいろ取り組んできましたが、世の中から認められているのは、“地盤沈下なんだな”ということでした。

振り返ってみますと筆者の卒業論文（1968 年のことです）は、「火山灰質土の二次圧密について」というタイトルでしたが、この研究に取り組むことになった時、指導教官（現在は、指導教員と呼ぶ）から最初に読むように勧められた論文が次のようなタイトルでした。

FOUNDATION DESIGN AND BEHAVIOUR OF LATINO AMERICANA IN MEXICO CITY,
(メキシコシティにおけるラテンアメリカタワーの基礎設計と挙動)

著者：LEONARDO ZEEVAERT, 掲載雑誌：GEOTECHNIQUE, VOLUME VII (1957), 118-125

ご承知のように、メキシコシティは極めて軟弱な粘土地盤の上に成り立っていますので、大理石でできた建物の自重による地盤の沈下や地下水のくみ上げによる地盤沈下がとりわけ有名で、1984 年までは、メキシコで最も高いと称されていましたラテンアメリカタワーの建設にはこのことが心配されたようです。そのため、このタワーの設計には、著名なレオナルド・ジーバールト教授とネイサン・ニューマーク教授が関わることになりました。ジーバールト教授（メキシコ国立自治大学）は地盤工学、ニューマーク教授（米国・イリノイ大学アバナ・シャンペーン校）は構造力学の碩学ですから、事の重大さが伺われます。このタワーの最上階に、建設の歴史に関する資料が展示されています。実は、このお二人は専門分野は違いますが、ともにイリノイ大学アバナ・シャンペーン校の卒業生です。



写真 1 ラテンアメリカタワー（2019 年撮影）



写真 2 ニューマーク教授（2019 年撮影）

最初に読んだ論文がメキシコ市の地盤沈下に関するものだったことから始まって、メキシコにはいろいろ縁がありまして、首都を中心に何度かメキシコを訪れました。特筆すべきことは、上記論文の著者のジーベルト教授にお会いして、メキシコシティクレイのお話をする機会があったのは感激でした。学部4年生の時に読んだ論文の著者に直接お会いできるなどという偶然はそんなに起きることではないのでは？と今となっては思い出に浸ることしきりです。

そんなこともあってか、茨城大学に赴任した直後の1992年に、JICAの要請で、メキシコ国立自治大学（UNAM）付設の「地震防災研究センター」（CENAPRED）に3か月滞在したことがあります。当初、JICAの要請は1年間の予定だったのですが、当時、研究室の助手をされていた村上哲先生（現・福岡大学教授）から、「学部学生が5人もいるのに、1年間も不在にされるのは困ります」といわれて、3か月となりましたが、CENAPREDの地震防災チームには、地震学の権威である入倉考次郎先生（京都大学名誉教授）がおられ、いろいろご教授いただきましたのも思い出に残っています。

さて、表題の「地盤沈下」という言葉は、“液状化”と並んで、最近では、比較的、社会的認知が行き届いている言葉ではないかと思われそうですが、筆者は、「地盤沈下」はどちらかと言うと“地下水のくみ上げによる沈下”（Land subsidence）を意味していて、地盤工学における構造物による沈下は「地盤の沈下」（Settlement of foundations and structures）と理解しています。一方、Land sinking という表現もありますが、これは、2011年の「東北太平洋沖地震」で見られた地殻変動による沈降を意味しており、ここでいう「地盤沈下」や「地盤の沈下」とは異なると考えられます。

冒頭の“地球クライシス”という番組の中での「濁水と地盤沈下」では、佐賀県白石平野の地盤沈下が取り上げられ、大先輩の三浦哲彦先生（佐賀大学名誉教授）が丁寧な解説をされていて興味深い番組になっていました。

かって、“公害”の一つに挙げられていた「地盤沈下」が地球環境問題と強い結びつきができるとはだれも想像だにしていなかったと思いますが、近年の気候変動に伴なう“豪雨と濁水”という相反する極端現象に遭遇してこんな形でマスコミに取り上げられてクローズアップされるのは“感慨^{ひとしお}”という感があります。

“取り木した バキラの枝葉 伸び上げれ
いぶきの音の 聞えるかのよう”
（安原一哉，代表理事）

新たな方向性を確認したい：個別最適から全体最適へ

2015年関東・東北豪雨による鬼怒川の越流破堤を受けて、国土交通省は粘り強い堤防の整備を目指す「危機管理型ハード対策」を打ち出し、堤防の天端あるいは堤脚の強化を図ってきましたが、その後の2019年（令和元年）台風19号による洪水で発生した全国の142箇所の堤防決壊を受けて、更に新たな取組みの方向性が示されています。

一つは、堤防の天端、堤脚に加えて、裏法面の強化も含めた「従来の粘り強さを上回る危機管理型ハード対策」の展開です。それは、越水に対して減災効果を発揮する「粘り強い河川堤防」の技術開発に必要な技術的検討を目的として、令和4年5月に設置された「河川堤防の強化に関する技術検討会」の審議事項から知ることができますが、同検討会では今後の取組みについて、新たな方向性を示していません。それは、従来は堤防を越水させない堤防整備が基本でしたが、堤防に対する要求性能として「越水に対する性能」が付加されたことです（図1参照）。さらに、「粘り強い河川堤防」の要求性能の数値目標が示されたことです。その技術開発目標（評価の目安）として、「越流水深30cmの外力に対して、越流時間3時間」が設定され、3時間は越水に対する性能を維持する堤防構造とすることが要求されることになりました。

ここで、性能設計、性能評価の視点からは、越流水深と越流時間は「性能の評価指標」であり、30cmと3時間は「性能の評価基準」に相当しますが、越水に対する粘り強い河川堤防のための技術・工法の開発者は、自らが提案する技術・工法について、上記の数値目標の性能を満足することを、根拠・エビデンスにより示すことが必要になったと言えます。

数値目標が決められたことは、開発の目標が明確になったと言えますが、課題は要求性能を満足する根拠・エビデンスが提示できるかということになります。従来の長年にわたり取り組まれてきた技術開発は、堤防の堤外地（川表側）に関係する河岸侵食、浸透に対する対策を目的としてきているため、堤内地（川裏側）の侵食、破堤に関係する「越水」は対象としていなかったことから、「危機管理型ハード対策」含めて、越水に対して妥当性が確認された技術は皆無、未知の領域とも言えます。

しかし、数値目標が示された以上、何らかの対応を取る必要があり、そのための新たな視点、工夫が必要になると言えますし、そこに新たな技術の展開があるとも言えます。言い換えると、堤防でも具体的、定量的な性能設計に移行し始めたと言え、先行する橋梁などと同様に、今後は、定量的な性能明示を意識することが必要になります。

二つ目は、治水関係での新たな動きである「流域治水」です。これも令和3年度から本格化しており、その具体的な取組みが進展し、身近に感じられるようになるのは、これからと思われませんが、当面、国土交通省は「防災・減災、国土強靱化の5か年加速化対策」を推進しているので、産・学・官の関係機関は、そのための技術開発・提示、事業への反映・活用など、積極的な対応が必要と言えます。

なお、「流域治水」は、上記の堤防の整備だけでは、近年の甚大かつ想定外の洪水に対して、限界があることから、流域全体として知恵を出して対応しようとするものです（図2参照）。

ここで、一つ目の「従来の粘り強さを上回る危機管理型ハード対策」は、性能設計の深化による堤防

構造の最適化、言い換えると、「個別最適」を目指すものであり、二つ目の「流域治水」は流域全体での諸対策による流域最適、言い換えると、「全体最適」を目指すものであると言えます。

なお、このような「個別最適」の深化に加えて、「全体最適」による総合的な対応の姿勢は、治水だけでなく、道路分野においても、例えば、個々の道路構造物の最適設計から、道路ネットワークに対する、道路リスクアセスメントの実施（令和4年度）の動きからも分かります。

このように、最近の事業の視点は「個別最適」から「全体最適」にシフトしていると思われませんが、全体を俯瞰することにより、事業本来の目的、取り組みの方向性、対応策の位置付けが明確になるとともに、想定外の災害などに対しても柔軟に対応が可能になり、さらに、社会インフラを享受あるいは利害に関係する国民などからの理解の向上が図れることが期待できます。

以上のような最近の行政的、技術的な背景、動向などを鑑みて、防災・減災、国土強靱化などの政策の実現に資することを目的として、現行の性能設計、性能評価について、道路分野、河川分野、海岸分野、砂防分野を横断的に俯瞰して、現在、「防災・減災、国土強靱化のための性能評価の最適化の実務—個別最適から全体最適に展開—」と題した技術的な参考図書を準備中です。

2023年春には、（一社）地域国土強靱化研究所から刊行する予定ですので、その折には参考にして頂ければ、幸いです。

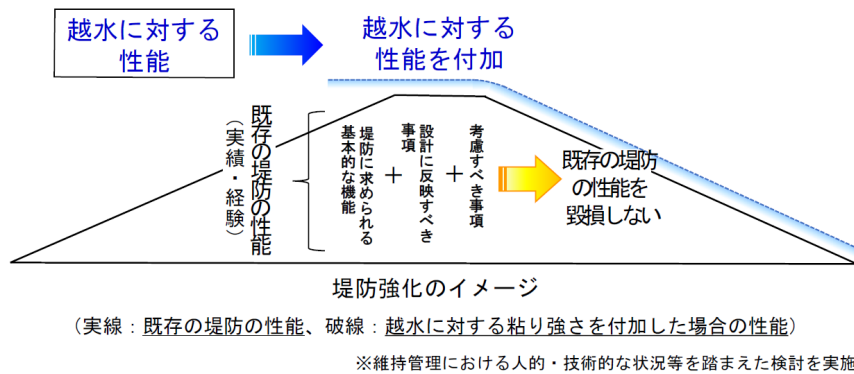


図1 河川堤防の強化に関する技術検討会（2022.5.20）による



図2 流域治水の概念図：国土交通省による

“「人新世」のはじまり”という視座：令和 5 年を迎えて

新しい年を迎えたのですから、夢のある話から始めようか、と思っていたのですが、この厳しい世界情勢を考えますと、あまり悠長に構えてはられないのではないかとこの思いから、皆様と危機意識を共有したいと思い、表題のようになってしまいました。

実はこのような思いに駆られましたのは、11 月の末に、学会会報 No. 955(2022, IV) で「人新世の環境危機と二十一世紀のコミュニズム」（東京大学・斎藤幸平准教授）という講演要旨を読んでちょっとした衝撃を受けて以来考え続けていたためでした。その講演の趣旨は、コロナ禍も気候変動もあくなき経済成長を求める資本主義がもたらしたもので、慢性化する気候危機を克服するためには、「脱成長」へ舵を切るべきである、というものでした。新鮮な驚きを覚えましたので、直後に、若い友人（元同僚）に意見を求めるためにメールを送ったところ、「それって 2 年前から話題になっていてネット上で色々物議をかもしていますよ」といって、斎藤幸平著「人新世の「資本論」」（集英社新書、2020）を紹介してくれました。早速購入して読んだところ、瞠目してしまいました。特に、見開きに、“SDGs は「大衆のアヘン」である”とあるのを見て、“物議を醸すのは当然だな”と思いました。ただ内容はすらすら読めて納得させられました。だからと言って洗脳されたわけではありませんのでご安心ください。この驚きは久しぶりで、佐和隆光著「グリーン資本主義」（岩波新書、2009）を読んで以来のことです。

このことを、12 月 15 日の“E&E セミナー 2022”（3 日目）の総括の際に問題提起させて頂きました。また、法人会員・東京インキ(株)様の清川伸夫氏と年末に懇談する機会がありましたが、話がここに至りました。そのときに、斎藤幸平著「大洪水の前に～マルクスと惑星の物質代謝～」(原著はドイツ語で著者本人が邦訳、角川ソフィア文庫、2022) も一緒に読みましょう、ということになりましたので、早速購入して年末年始に読んでみましたが、こちらは結構手ごわく難解でまだ読み切れていません。

さらに、このようなことは、これからの若い人にぜひ考えてほしい、という思いから、昨年末の 12 月 23 日に元在職していた研究室の学生さん（15 名くらい）に、OB 教員講話として、“大事にして来たもの：常識を疑うことと挑戦すること”と題するお話をさせて頂いた機会にも“クリスマスメッセージ”として“脱成長”の話を紹介させて頂きました。ただ、理解してもらえたかどうかは、定かではありません。その時の学生さんからの質問は「前向きに取り組むきっかけは何でしたか」とか「今取り組んでいる研究は何ですか」など、やはり現実的でした。

斎藤幸平博士のような新しい視点からの提言には、やはり、批判も多いようですので、批判本のひとつ、柿埜慎吾著「自由と成長の経済学 「人新世」と「脱成長」コミュニズムの罠」(PHP 新書、2022) を読んでみました。批判の内容は良く理解できたのですが、論調がややヒステリックのうえ、“では、われわれはどうすればいいのか？”という提案がないのは残念でした。

このような思いに“もやもや”しながら年末年始を過ごしていましたが、TV などでは、“岐路に立つ資本主義”などの言葉が目についてグローバルな課題だと再認識させられました。さらには、資本主義とともに、民主主義も今のままでのままでの存在意義も問われていて、もしかしたら資本主義よりも深刻かもし

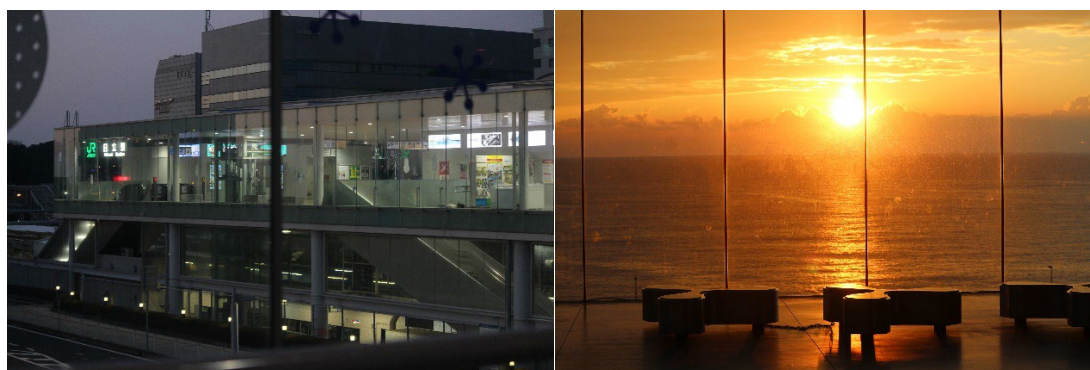
れません。そうこうしているうちに、1月9日の午後のNHK TV BSで、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の「白熱教室」（2022.6.4放送分の再放送）を久しぶりに見ましたが、そのタイトルが「中国って民主主義国?」というものでした。米国、中国と日本の若い方々の討論を通じて、民主主義にもいろいろあることを知らされて驚きました。

一方、我々が主たる活動の舞台としている建設産業界に目を向けてみますと、少々不安にかられます。1月のある日、某所で建設関連団体の賀詞交換会があり、乞われて出席しましたが、岐路に立っている資本主義や民主主義の現状をどうとらえ、どのような方向に進もうとしているかを確認できませんでした。筆者の不安の一つは、かつての“列島改造論”と今の“国土強靱化論”のどこに違いがあるのでしょうか?という問いに対して明確な答えが用意できていない、というところにあります。

人や組織は岐路に立たされた時どうするのでしょうか?ほとんどの人や組織は、このように問いかけると、“前に進む”と答えるでしょうが、方向性が不確実の今、立ち止まって考えることがもう一つの選択肢です。最後のひとつは、後戻りすることですが、ほとんどの人や組織はできないでしょうし抵抗があるでしょう。

こういう時代に必要なことは何でしょうか?個人的には、“覚悟”であると考えています。行先短い筆者が言うのはおこがましいのですが、“どんな時代になっても生き延びてやる”という覚悟が求められていると思っています。そのことを昨年12月23日に若い学生さんへの講話の最後のメッセージとして送りました。

さて、われわれ LRRI は、どういう覚悟を持って、“利他”と“自他共栄”を実現していけばよいのでしょうか?できるだけ早い時期に、ぜひ、会員の皆様と議論をする機会を持ちたいと願っております。



(世界で最も美しい駅の一つと言われる JR 日立駅にて、令和5年元旦)

【注】人新世（ひとしんせい、あるいは、じんしんせい）：国際地質科学連合（IUGS）が是非を議論している、“環境危機の時代”を象徴する学術用語。我が国では、大分県沖・別府湾で検証のための調査が行なわれている（読売新聞、令和4年11月27日朝刊による）。

“元旦の 朝日を浴びて この覚悟
超えてみせるぞ 八十の壁”
“雲間から 今年も見たぞ 初日の出
八十の壁 目前にして”
(安原一哉、代表理事)

防衛予算から考える「このくにのかたち」

世界でコロナが猛威を振るう中、ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まった、およそ1年前の2022年2月24日。いま2023年1月、マイナス15度、窓ガラスのない停電した建物の中で凍えている多くのウクライナの人々がいる。この軍事侵攻の主導者は核兵器使用の可能性についても言及し、世界を脅迫している。そして、近隣の北朝鮮は経済制裁をうける中、2022年の1年間に過去最多73発のミサイルを日本海あるいは日本上空に発射した(毎日新聞2022年12月31日)。さらに2010年に日本のGDPを抜いた中国は、経済成長とともに軍備増強を進め、いまや日本の4倍、米国に次ぐ世界第2位の国防費を費やして、2025年には台湾を全面的に支配する能力をもつと自ら宣言している。これら世界の脅威となっている国のトップは何れも独裁体制の下で、絶大な権限をもち、過激な政策を導入してきている。

このような地政学的報道が日常的に流れ、高度成長期に生まれ、バブル経済を経験した平和ボケ世代(?)の我々一般国民にも国防の重要性が身近に感じられるようになっている。我々日本人は、戦争放棄・戦力不保持・交戦権否認を謳う日本国憲法のもとで、我々の国土をどのように守るべきか…大上段のお題を掲げてしまったが、防衛(軍事)と国土保全について考えてみた。

まず日本の防衛(軍事)は、平和のための平和論の言葉遊びでは現実的な対応はできないと思う。ロシアのウクライナ侵略を見てのとおり、独裁者達の野望は、正常性バイアスに浸った我々から想像できない強い行動力を持っていると考える。その行動力による実物のミサイルが日本国土に飛来したとき、我が国の迎撃ミサイルは機能するのか。また日米同盟に基づいて米兵は戦ってくれるのか?恐らく迎撃ミサイルは、ウクライナでの実態と同様にせいぜい70%程度の命中率であり30%程度は日本領土、領海に着弾し、日本の社会経済と日常生活を破壊するであろう。そして、米兵は戦う日本人と共に戦っても、戦わない日本のために代理戦争はしないであろう。政府は安保関連3文書の改訂を閣議決定した。我が国の専守防衛のためには、繰り返されるミサイル攻撃を抑止する反撃能力の保有を進めるべきと考える。果たしてこれで十分か。ウクライナ人の不屈の精神で国を守る姿を見ると、積極的な平和主義の立場から日本を守る日本人の意思を醸成する啓蒙、教育も必要でないかと考えてしまう。

そして防衛(軍事)との関連から国土保全をみると、有事の際に自衛隊が効率的に活動できる体制整備が必要であり、空港、港湾、さらに鉄道、道路も防衛施設として有効に活用できるように整備しておくことが重要である。特別重点拠点された公共インフラを新たに創設された特別枠の予算で整備促進することに大いに賛成する。3文書の一つ「国家安全保障

戦略」では気候変動問題や感染症危機を始め、国境を越えて各国が協力して対応すべき諸課題も同時に生起」していることを指摘している。老朽化が進み、自然災害に晒される公共インフラの強靱化を図る LRR I の活動は、専守防衛に繋がる国防の一翼を担っているといえよう。

さて、とても大きなお題について述べてみたが、地盤工学の隅っこで、土工構造物に携わっている筆者の活動を省みると聊か小さな行動でしかない。防衛、国土保全どころか、デジタル DX、BIM/CIM、IoT、グリーンインフラなどの標準的になりつつある技術に対して技術者としてついていくのが大変である。さらに個人的な日常生活でインフレを実感する中で、防衛費のための増税に積極的に賛成できるか…じっくり考えたい。

2023 年 1 月 31 日

LRR I 理事 小浪 岳治

日本の土台を新しく。



岡三リビック株式会社

飛ぶ教室：あれから12年

高橋源一郎氏は筆者の好きな作家のひとりですが、実は、同氏の書いた小説を読んだことはなく、読んだのは「一億三千万人のための小説教室」（岩波新書、2002）と「高橋源一郎の飛ぶ教室―はじまりのこぼれ」（岩波新書、2022）くらいなのです。では、なぜ好きな作家なのか？と聞かれますと明確に答えることが出来ないのですが、ラジオ番組や書籍を通じた同氏の人となり胸に響くところがあって筆者だけでなく、多くのファンがいるのではないかと思うのです。それに、あらゆるジャンルと言っていいほどたくさんの本を読んでいるのには驚かされます。作家だから当然だろう、と思われるかもしれませんが、「作家の中で僕ほど本を読む作家はいないのでは？」と自負するくらいですから並ではないと思います。たとえば、上記の「高橋源一郎の飛ぶ教室」には、新書版なのに紹介されている88冊の作品（全部が小説ではない）のうち、マイナーなものも多くあって、筆者が知っているのは数冊、読んだことのあるのは3冊しかありません。そのうちの1冊に、宇佐美りん著「押し、燃ゆ」（河出書房社、2020）というのがありました。最初この本を見た時に、恥ずかしながら、“押し”という言葉の意味を知らなかったが、読んでみてやっと理解しました。高橋氏の著書の中で、この書籍に触れているところでは、高橋氏の“押し”は、ボブ・ディランであることを知り、手をたたくような思いでした。ご承知のように、ボブ・ディラン（と呼び捨てにしていかがうかはわかりませんが）は、2016年ノーベル平和賞を受賞しました。ただ、授賞式には出席せずに、翌年の2017年にストックホルムで記念講演を行いました。その時の英文内容はネット

[\(https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2016/dylan/lecture/\)](https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2016/dylan/lecture/)でも公開されていますし、解説本（畠山 雄二著「英文徹底解説 ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞スピーチ」、ベレ出版、2019）も出ていて、名文だという評価ですが、残念ながら著者にはその評価の是非はよくわかりません。ただ、高橋氏の“押し”がボブ・ディランというのは感激で、実は筆者も同感なのです。と言いますのも、代表曲「風に吹かれて」を中心にして彼の音楽が流れていた1960年代は大学紛争が吹き荒れていた時代で筆者もそれに巻き込まれたうちの一人でしたが、ボブ・ディランはそういう中でのヒーローでしたし、今でもそうです。なぜなら、「風に吹かれて」の歌詞を読み返してみても、今でも通じる内容でディランの才能の一端に触れるようです。

高橋氏の著書の表題にあります“飛ぶ教室”は、もともとは、ドイツの作家、エーリヒ・ケストナーの「飛ぶ教室」に由来するとのことでしたので、早速、電子書籍（高橋健二訳、岩波文庫、2006）で読んでみました。読んでみて、なぜ彼の著書やラジオ番組に“飛ぶ教室”と銘打ったのかが理解出来ました。ケストナーの作品は、友情、師弟愛、親子愛に満ちたヒューマンヒストリーで、随所にみられる高橋氏のやさしさに共通しているのです。

筆者にとって同氏との最初の出会い（と言っていいのかわかりませんが）は、2012年4月2日から2020年3月12日まで続いたNHKラジオ第1放送の「すっぴん！」という朝の番組を聞いていた時でした。毎週金曜日のパーソナリティーが高橋源一郎氏で“ゲンちゃんの現代国語”と題して8年間で300ほどの作品を紹介し同氏なりの分析を聞かせるもので毎回納得させられものでした。作家ですから当

たり前のことですが、同氏の書き物やラジオでの語りは、“ことば”を大事にするところが多くの人の心に響くのではないかと思うのです。加えて、日の目を見ていないが秀逸と思われる作品を紹介する思いやりとやさしさを感じます。

「すっぴん！」が放送されていた当時、筆者はすでに大学を退職していましたが、公的な研究費を残していたことで大学のオフィス（水戸キャンパス）の使用を許されていたので、移動にはもっぱら車を使っており、その車の中でいつもラジオを聞いていました。この番組の後、「飛ぶ教室」が引き継ぐ形になっていますが、これも毎回楽しい内容になっています。

筆者は、2019年の1月、突然の病に襲われましたが、病後の今は、朝夕の散歩のときにいつもラジオを聞いています。テレビの4K放送や多機能なスマートフォンなどの急速な広がりの中で、ラジオの楽しさや大切さが忘れられがちですが、思えば、2011年の“東日本大震災”を引き起こした“東北地方太平洋沖地震”の直後は電気や水道がしばらく不通でしたので、たまたま自宅にあった携帯ラジオが唯一の情報源でした。“あれから12年”，政治を司る方々を中心に、昨今の社会情勢は、あの時の悲劇を忘れさせていく状況を醸し出そうとしているようで不安を覚えますが、初めて経験した未曾有の“連鎖災害”の教訓を長く生かしていく姿勢の大切さを改めて会員の皆様とご一緒にかみしめたいと思っています。



(高橋源一郎氏の著書)

カキーンという 余寒のなかの 球音は

待ちに待った 春の訪い^{おと}

(安原一哉，代表理事)

「地震と油断を考える」

日本のスペイン風邪の被害状況は、内務省衛生局の資料で1918年8月から1921年7月までのおよそ3年間で患者数23,804,673人、死亡者数388,727人となって流行は3回でした。

また、新型コロナウイルスは、厚労省のまとめによると2023年3月23日現在で感染者数33,398,536人、死亡者数73,632人で現在の流行は8波となり収束に向かっている様に見えます。

そして、9波が来るのかどうかは不明で、何故、流行・波等周期があるのかも未解明です。私の知識不足を反省しつつもまさかここまで流行が繰返されて感染が拡大するは思いませんでした。

一方、地震にまさかはありません、残念ですが過去の歴史が示す様に確実に起きます。

内閣府の発表では、南海トラフ巨大地震と同様に首都圏直下型巨大地震が30年以内に70%の確率で起きるとされています。

起きるのは分かっているので、地震発生前と発生時そして発生後にどのような行動をとるべきなのかが重要なのは言うまでもありません。

『東京都の新たな被害想定 令和4(2022)年5月25日-東京都防災会議』の被害想定は衝撃的で、異なる地震の発生場所毎の建物被害や死者数を想定しています。

加えて、地震発生直後から1ヶ月以後程度までの時系列で避難所・自宅・帰宅困難等の状況に応じた被害の様相や防災、減災対策による被害軽減効果が具体的に示されています。

首都圏他も建物の耐震化が進んでいますが不十分な建物も多く存在しています。

加えて、密集した市街地も多く、救助・救援活動も滞る事が想定されています。

耐震マンションに住んでいる人でも市中で被災する事もあります。

被害想定は、想定ではなく事実となるものと考え、対策・対応をすることが望ましいと思います。

阪神淡路大震災(1995.1.17)で発生した火災による被害状況は言葉を失うものでした。

そして、人は、これらの被害想定、死者数に自分が入るかもしれないと考える人はどれほどいるのでしょうか。もちろん、それを考えることは苦しく受け入れがたい事です。

とにかく、地震発生時は身を守る事を最優先し、その後は余震にも備えて安全な場所に避難をする事が第一です。

しかし、その後のガス、電気、水道、交通機関等のライフラインの復旧も確認作業を含めると長期化することが予想されています。

加えて、社会生活を営む上で必要なインフラにも大きなダメージを受けることになります。

考えなければならないことは数え切れずありますが、日々巨大地震を自分事と考えて油断をせずに過ごしていきたいと思います。

2023年3月31日

LRRRI 理事 岡本 昌弘

Chat GPT

AI の急速な進化で、対話型の AI として、Chat GPT なる新しいツールが登場して世の中を騒がせています。会員の皆様も一度は試されたことでしょう。ご感想は如何でしょうか？ご意見はいろいろありそうですので、LRR1 内で、Chat GPT 談義のようなものやってみてはどうでしょうか？

筆者も何度か試してみましたが、“筆者のような年寄りがやたらに使うと、認知症やフレイルを加速するので、よく考えて使おう”というのが現在のところの結論です。Chat GPT のような便利な機器に頼ると、勢い、思考することと記述する機会が少なくなってきます。このことが老人（あるいは、高齢者）の認知症やフレイルを加速する一因になる、というのが筆者の勝手な結論です。ということで、今のところは、やたらにこれに頼らないように心がけています。答えがたちどころに帰ってくる点では、不思議な快感に襲われますので、麻薬のようなものだ（もっとも麻薬を使用した経験はないのですが）、と思って注意しています。

Chat GPT は便利ですが、さらに注意すべきことがあります。例えば、“低炭素社会へ向けて地域の企業ができることは何ですか？”と問いかけてみますと、きちんと整理された答えが返ってきましたが、よく読んでみますと、何も新しいことはなく、はっと気が付くこともありません。ですから、出てきたものを自分の目的に沿って整理し、そこに自分の考えを追記することには役立つかもしれませんが、筆者は余りやりたくありません。自分が整理したものを確認するために、あるいは、検証のために、参照することはあるかもしれませんが、

Chat GPT に頼るときに、とりわけ、研究者が留意しなければならないのは、記述されたものがどのようなリソース（参照、参考、あるいは、引用したもの）に基づいているのかという点です。Chat GPT の回答にはこれが記述されませんので、参照元が不明なのにやたらに出てきたものを使っていると、盗作など“研究不正”に問われる怖れがあります。これは研究者にとっては致命傷になります。名著「研究不正」（中公新書、2016）を書かれた黒木登志夫先生がどのようにお考えなのかをお聞きたいものです。

やや悲観的なことばかり書き連ねましたが、面白いエピソードもあります。3月号で紹介しましたNHKラジオ番組「飛ぶ教室」のなかで、劇作家・平田オリザと高橋源一郎の対談（4月7日放送）があり、その時に Chat GPT も取り挙げられていました。お二人の一致した結論として、「“Chat GPT”の出現で作家という仕事はいずれなくなる」ということがありましたが、筆者はそうは思いませんでした。なぜなら、現在の Chat GPT は、創造的仕事は苦手だからです。また、仮に小説にしたい材料を提供しても、個性的なものはでき上ってこないでしょう。だからこそ、人の手で創作することに意味があり、面白さもあると思うのですが如何でしょうか？

もしかしたら、近いうちに、AI と人類の戦いが生まれてくるのではないか、という危惧はあります。筆者は幸か不幸かそのような時代にはもはや生きながらえてはいないだろうとは思っていますが。

DX やら GX 横文字だらけの この日常
かそけき和語は どこへ行くのか
(安原一哉, 代表理事)

ありえない日本人

2023年3月22日平日の午前中である。全く日本的である私の会社は在宅などすることもなく、殆どの社員が出勤し仕事中的はず。にもかかわらず、どうなった、どうなった、飛び交う有り様。そうWBC決勝、大谷翔平がマイク・トラウトを三振に切って取り日本が3度目のWBC制覇を成し遂げた日である。

話は変わって少々昔、1995年ロサンゼルス・ドジャースにてデビューした野茂英雄はトルネード投法を引っ提げて、画面越しでもわかるほどの落差のフォークボールでバツバツと三振の山を築いていった。昭和のごく平凡な家庭に生まれた私は当たり前のように野球少年となり、田無という現在は無い市の小学生選抜にバッティングで辛うじて選ばれ中学では4番打者、先輩や友達の兄は甲子園に行ったりとそこそこ腕前に自信がある人種の中で育った。その中ではジャイアンツやライオンズ(西武線沿線なので)が憧れの対象であり現実の世界であった。野茂英雄が近鉄と良くない状況であることの報道をうっすらと記憶している。凄いピッチャーではあったが俺が町の球団でもなく、パリーグのピッチャーがしょうがなくアメリカに行ったのかな、程度の認識だった。それがもう、ありえない!

ちなみにWBC時、紹介されたのでご存じの方も多と思うが野茂のドジャース時代の女房役(キャッチャー)は今回のイタリア代表監督のマイク・ピアザで、その日本での人気ぶりは今回の侍ジャパンのヌートバーに匹敵していた。来日時野茂とTVに出演した際のピアザのお尻の大きさにやっぱり野茂以外の日本人では勝てないよな、と思ったことを記憶している。

私が小さい頃はまだまだ昭和の雰囲気ガムンムンで西武線田無駅の南口にある「だるま」という焼き鳥屋に父親によく連れていかれた(お酒はもちろん飲んでません)。ビールケースを裏返しにして座布団載せた椅子に客が座るような店だったが手羽先が本当に美味しく、珍しく豚足も出す店で酢味噌を付けて子供なのに食べていた。余談になるが周りの大人たちはホッピーなど飲んでおらずビールの記憶しかない。レモンサワーはあったかな?そしてそこでは当然、野球の話が飛び交っているわけで4番と言ったら、山本浩二、田淵幸一、若大将 原辰徳、そして引退していたが世界の王貞治。王さんの下にベブルース、ハンクアーロンの記録があると皆誇っていたが、わかってましたよ、幼心に。アメリカでは尊敬されつつも参考記録、心無い人たちには相手にもされてないって。ところが2003年ピンストライプのユニフォームを来た日本人が、4番として打席に立つ。松井秀喜である。え、日本人がニューヨーク・ヤンキースの4番を打つ?興奮を通り越して寒気までする中で何故か王さんも長嶋さんも救われたような気持ちになった。そして2009年ワールドシリーズを制覇しMVP。本当にありえへん!

エコノミックアニマルの呼称も泡と消え、先の大戦でも負け戦、フビライ・ハンにラッキーな防衛勝ちがあったものの卑弥呼の時よりやっぱり大国には敵わないと根っこではあきらめている民族__日本人とまで言うのはネガティブすぎるのだろうか。

一方で竹原慎二、村田諒太がミドル級の世界チャンピオンとなり、錦織圭はセンターコートで跳躍、マスターズチャンピオンに松山英樹がなり、イチローのフィールドでの佇まいはGod Save the King! __世界のどこの人たちですか?もう、ありえない、ありえない。

時は流れ、ここは有楽町の小樽という居酒屋。令和5年だというのに煙草が吸えホッピーを飲みながら昭和気分（あれ？）になっている。画面に野球のダイジェストが写りフォークはスプリット、スライダーはスパーと名前を変えたが、メジャーリーガーの丸太のような腕は変わらない。エンゼルススタジアムでは毎日ボックスに入るかマウンドに上がるか、している彼は今日も上々のようだ。沢村賞、間違えたサイヤング賞獲得は、そう彼なら日本人なら、もちろんあり得るだろう。

（理事 田中富智夫）